

チベットをめぐる日本の諜報活動と秘密工作

―一八九〇年代から一九一〇年代を中心に― (一)

澤田次郎

キーワード…チベット、日本、情報、成田安輝、寺本婉雅、青木文教、

福島安正、青木宣純、矢島保治郎

目次

はじめに

- 一 チベットの国際的位置関係
- 二 第一次諜報工作与成田安輝
- 三 第二次諜報工作与寺本婉雅
- 四 第三次諜報工作与青木文教……………以下次号掲載
おわりに

はじめに

一八九五(明治二十八)年、日清戦争の終了によって清の弱体化が明らかになると、西洋列強の同国分割が活発化する。一八九七年、ロシア

が旅順、大連の租借権、南満洲鉄道の敷設権を獲得すると、それに対抗してイギリスは九龍半島北部(新界)、威海衛の租借権を手に入れるなど、列国はそれぞれの勢力圏を設定していった。衰退した清朝は辛亥革命によって瓦解し、一九一二(明治四十五)年の中華民国誕生を見ることになるが、このように二〇世紀の開幕前後、東アジアは大きな変動に直面した。

右の過程で日本外務省、陸軍参謀本部はチベット情報の収集をはかるとともに、参謀本部がダライ・ラマ十三世を日本側に取り込む秘密工作を進めるなどチベットに関与する。それと同時に民間でもチベットに関心もつ者が現れ、鎖国状態にあったチベットへの潜人があいついで行われた。ここでラサをめざした人物と同地に到着した時期を掲げておく。^①

① 河口慧海(黄檗宗僧侶・仏教学者)……………一九〇一年三月、一九一

四年八月

- ② 能海 寛（東本願寺僧侶）……一九〇一年四月に雲南省大理から
 出發後、消息不明
- ③ 成田安輝（外務省調査員）……一九〇一年十二月
- ④ 寺本婉雅（東本願寺僧侶・仏教学者・参謀本部工作員）……一九
 〇五年五月
- ⑤ 矢島保治郎（冒険旅行家）……一九一一年三月、一九一二年七月
- ⑥ 青木文教（西本願寺派遣僧・チベット学者）……一九一三年一月
- ⑦ 多田等観（西本願寺派遣僧・仏教学者）……一九一三年九月
- 〔以下、本稿が扱うより後の時期〕
- ⑧ 野元甚蔵（ウランホト特務機関調査員）……一九三九年十月
- ⑨ 木村肥佐生（大東亜省内蒙古大使館調査部員）……一九四五年九
 月
- ⑩ 西川一三（大東亜省内蒙古大使館調査部員）……一九四五年十月

近代日本とチベットの関係については、これまで東洋史、チベット学、
 仏教学を専攻する人々がアプローチを試みる場合が多く、河口慧海、能
 海寛、寺本婉雅、青木文教、多田等観といった学僧のチベット体験を中
 心として研究がなされてきた。とくに近年、高本康子氏が優れた論文を
 次々と発表し、この分野を大きく発展させている。またチベットを含む
 アジアにおける大谷光瑞の幅広い活動について多くの学者が知見を積み
 重ね、研究が飛躍的に進んでいることは周知のとおりである。

その一方で国際政治史、日本政治外交史の観点からこれを検討する論

考は比較的少ない状況にあり、最近ようやく本格的な端緒が開かれるよ
 うになった^③。しかしながら諜報と秘密工作という視点を正面に据えてそ
 れを掘り下げたものはきわめて少ない状況にある。そうした中で本稿と
 もっとも関係する研究として、①外務省から派遣された成田安輝のチベッ
 ト行（一八九七年末出發——一九〇二年帰国）の実態を明らかにした木
 村肥佐生氏^①、②福島安正と寺本婉雅の対チベット接近工作（一九〇八年
 八月の五台山会談の実現、ならびにその直後のダライ・ラマの使節日本
 派遣の試みと中止）を考察した篠原昌人氏^③、③青木文教の生涯を究明す
 る中でチベットの武器購入に対する彼の協力（一九一六年）に言及した
 高本康子氏の論稿がある^⑥。いずれもそれまで取り上げられてこなかった
 領域に光をあてた注目すべき労作である^⑦。

本稿はこうした先学の貴重な成果を参考にしつつ、成田安輝、寺本婉
 雅、青木文教の行った諜報ならびに工作活動を再検証する。その際、以
 下の点に重点を置くこととする。第一に一九〇〇年代から一九一〇年代
 までの比較的長い期間を考察対象に収め、全体の大きな流れを通観する。
 これまでの研究は成田、寺本、青木を別々に切り離して考えがちであっ
 たが、三人の活動を日本の対チベット諜報工作活動という一貫した見地
 からとらえ、その経緯を見渡すとともに、推移の過程に見られる特徴を
 把握してみたい。第二にそのプロセスを、主体者は異なるにせよ総括的
 にいって日本側が行ったという意味で便宜上、①第一次諜報工作（外務
 省・成田安輝）、②第二次諜報工作（参謀本部・寺本婉雅）、③第三次諜
 報工作（西本願寺・青木文教）という三つの形に区分し、それぞれ他の

研究者が十分言及していない、あるいは触れていない面を検討する。第三にアジア歴史資料センター（外務省外交史料館、防衛省防衛研究所蔵文書）だけでなく、大英図書館（インド省文書IOR: India Office Records, The British Library: Asian and African Studies）、イギリス国立公文書館（外務省文書FO371 Foreign Office: Political Departments: General Correspondence, The National Archives, Kew）の所蔵資料を用い、日本の諜報工作活動（とくに青木文教の武器購入協力）に対するイギリスの反応も合わせて見るように努めた。⁸⁾

以上に力点を置き、日本がチベットをめぐるいかなる形で浸透を試み、とくにロシアの勢力拡大を抑制しようと図ったのか、諜報と工作という観点からその実態を少しでも明らかにすることが拙稿の目的である。

なお本稿のタイトルに掲げた「日本の諜報活動と秘密工作」といっても、それは日本政府が策定した明確なプランにもとづく統一的、組織的なものではなかったことに留意しておきたい。当時の日本には統合的な国家情報組織がなかったのはもちろんのこと、陸軍の中でも系統的な情報システムができ上がっておらず、軍上層部の特定の人物が個々に情報員を用いるという小規模かつ個人的なつながりを柱とするケースが多かった。⁹⁾ これを本稿にあてはめるならば、例えば参謀本部第二部長（情報担当）、のち参本次長の福島安正が北京駐劄武官の青木宣純と連絡をとりながら現地工作員の寺本婉雅を支援している。ただし福島・青木——寺本のラインは上司——部下、雇用者——被雇用者、ケースオフィサー——エージェントの関係というよりも、日本をとりまく国際環境を憂慮

し、自国の安全と国益の確保をめざす同志、あるいは支援者——協力者の間柄といった方が現実には近かった。

他方、諜報工作活動が統一的なものでなかったからといって、日本にチベットに関するまとまった国家意志がなかったとはいえない。追って述べるように、日本指導層の特定の人々の間には、チベットをめぐる国際関係がアジアのパワーポリティクスに影響をもたらす機微に触れたものである、それだからこそチベットへの諜報や工作が必要である、あるいは逆に関与を手控えた方がよいという、時期によってその内容は逆転するにせよ、共通の意志、コンセンサス、ないしは空気のようなのがあったと考えられる。以上の点を考慮に入れながら、本論に入りたい。

一 チベットの国際的位置関係

日本とチベットの関係が幕を開けた一九〇〇年代初頭、チベットはダライ・ラマ十三世（一八七六年生誕、七九年即位、一九三三年崩御）の治世下にあった。¹⁰⁾

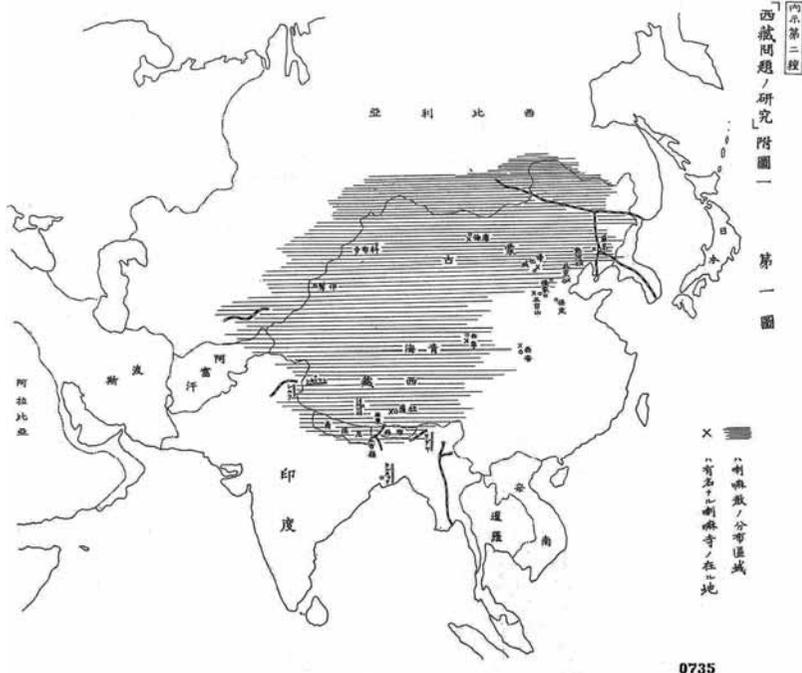
まず当時のチベットが置かれていた国際的な位置関係を整理しておきたい。第一にその地政学的な位置である。チベットは北と東を清、南と西をイギリス領インドに囲まれ、さらにロシアが清英の合間をぬってつながりを持ち、清英露それぞれの関係が交錯する場所であった。そうした強国のはざまにあってダライ・ラマを頂点とするチベットの指導層は、

いかに列強間でバランスをとりながら生き残るかという点を追求しなければならなかった。ただし彼らは大国から一方的に圧力を受けるだけでなく、それをかわすため、強国をうまく利用しながらサバイバルをはかろうと苦心した。その一環として後述するように、ダライ・ラマは第四、第五の勢力である日本、フランスをパワーゲームのプレーヤーに引き込もうとすることによって他の大国を抑制し、バランスの調整を試みることになる。

第二に宗教的な位置である。七世紀にインドから伝わり、その後独自の発展をとげたチベット仏教は、長い年月をかけて遊牧民による交流、モンゴル帝国の侵攻（一二四〇年）とその後の保護など、さまざまな経緯をふまえて周辺諸国に伝えられ、北は中国、モンゴル、ロシア、南はインド、ネパール、ブータンに広がり、十八世紀初めにはバイカル湖方面のブリヤート人の間に浸透した。チベット、モンゴル、満洲における諸民族の仏教徒にとって、ダライ・ラマは単にチベットの元首であるだけでなく観音菩薩の化身であり、その居城であるポタラ宮や巡礼者が集まるトゥルナン寺（ジョカン寺）を擁するラサは聖地であって、民族や国境の枠組を越えたチベット仏教文化圏の中心地であった。そうした中で宗教を共有するチベットとモンゴルの精神的なきずなが強まる一方で、国内に仏教徒の民族を抱える周辺大国はチベット仏教を政治的に利用し、住民の懐柔やさらなる進出のために利用した。またチベット側もそれを逆利用するなどして宗教の存続と発展をはかったのである¹¹⁾。

図1は明治末期（一九一一年）に海軍軍令部の研究資料に掲載された

図1 チベット仏教圏



出典：海軍軍令部『西蔵問題ノ研究』明治44〔1911〕年7月，33頁（第0735画像目），
防衛省防衛研究所戦史研究センター史料所蔵，⑨文庫一千代田-141。

チベット仏教圏を示す地図である。これを見ると、チベット仏教世界が国境を越えてアジア大陸の中心に広がっていることが一目でわかる。陸軍だけでなく海軍もこうしたアジア内陸部への観察を行っていたことがうかがえるが、のちに登場する学僧の寺本婉雅、青木文教はチベット仏

教に理解が深いだけに、これと似たような地図イメージを念頭に置きながら工作活動にあたっていたと考えられる。¹²⁾

このようにチベットは一見、辺境に位置するように見えながら、ユーラシア大陸の国際関係において地政学的、宗教的に見逃せないポジションを占め、一九〇〇年代に入るとイギリス、ロシア、清との関係が変動する中で、その戦略性は一層高まることになる。それでは、このチベットに対して周辺大国はどのような態度を示したのであるか。ここではごく基本的な関係史をまとめておくことにする。¹³⁾

まずイギリスの動きから見えていきたい。イギリスはインド直接統治の開始（一八五八年）に加えて、ネパール王国、シッキム王国を保護国化し（一八一六、一七年）、ブータン王国の外交権を取得した（一九一〇年）。このようにチベットに隣接するインドを支配し、チベット文化圏に属する三つの王国を勢力圏におさめるイギリスが、チベットの動向に敏感であったことはいうまでもない。

このうちシッキムはネパールとブータンの間にあり、インドからラサヤシガツェ（チベット第二の都市）に抜ける上で好個のルートとなる戦略上の重要地域であった。チベットはチベット系の王家が統治するシッキムを属国と考えてきたが、そこを抑えたイギリスがさらにチベットへ進出することを恐れ、シッキム領内に駐屯軍を配置した。これに対して英印軍は一八八八（明治二十一年）年、同軍を撃退した上、チベット領内のチュンビ溪谷まで侵入して軍事的示威を行った。その結果、一八九〇年、英清間にシッキム条約が結ばれ、チベット、シッキム間の国境が画

定し、イギリスによるチベット前進が容易になった。加えて一八九三年、イギリスはチュンビ溪谷のヤートン（亜東）に市場を開設する権利を獲得した。

ただしイギリスにはチベットを併合する意志がなかったことに注意したい。イギリスの目的はチベットへの影響力を保持し、それを緩衝国として維持することによって英領インドへの脅威を防ぐことにあった。しかしながらイギリスの圧力を感じたダライ・ラマは、彼の側近であったロシア領ブリアート系モンゴル人の仏僧アグワン・ドルジェフ（Agvan Dorjiev）を二度にわたってロシアに派遣し、同国の庇護を求め、工作を開始する。この訪問時、ドルジェフは皇帝ニコライ二世（Nicholas II）に謁見してチベットへの援助を要請したが、実際の援助内容について、またロシア側がどの程度までチベット問題に関与するつもりであったのかは研究者の間で意見が分かれている。¹⁴⁾

一回目の派遣時（一八九八年）、ロシア皇帝はドルジェフにチベットへの同情を示し、援助を書面の形で求めるよう示唆した。またアレクセイ・N・クロパトキン陸相（Aleksel Nikolaevich Kurapatkin）は軍事教官を送ってチベット軍近代化を手助けする意向を示した。次に二回目の派遣時（一九〇〇年）、ダライ・ラマはドルジェフを公式代表とし、彼を通じてロシア皇帝がチベットのパトロンのようになるよう希望した。またドルジェフは主要閣僚のウラジーミル・N・ラムスドルフ外相（Vladimir Nikolayevich Ramsdorf）、セルゲイ・Y・ウィッチ蔵相（Sergei Yulyevich Witte）、クロパトキン陸相にも面会し、陸相は義

和団事変下の北京でロシア軍が捕獲した「最新製の大炮」を譲渡する意向を示したが、実際にそれが実現したかは疑問であった。さらに三回目の派遣時（一九〇一年）、ニコライ二世からドルジェフに手渡されたダライ・ラマあての書簡には、ロシア側を拘束するような義務については何ら書かれていなかった。このときダライ・ラマはロシアと公式条約を結ぼうとし、ロシア・チベット協定案がロシア側の特別会議で議論されたものの、「何ら実際の利益をもたらさず、イギリスとの摩擦を引き起こす可能性があるため」結局却下されたという。他方、ドルジェフはラムスドルフ外相、ニコライ・G・ガルトヴィク外務省アジア局長（Nicholas Genrikhovich Hartwig [Gartvig]）とチベットにおけるロシア領事館新設の問題を話し合い、最終的にはドルジェフの主張にしたがってチベット領外の四川省サルツェンド（打箭爐）での設置が決定された。しかし実際にロシア領事が同地に赴任したのは一九〇三年であり、約一年余り後の翌年には早くも閉鎖されている。¹⁵⁾

以上のチベットによるロシア接近によって両者の友好が深まったことは確かである。とくにドルジェフの三回目の訪問はロシア、チベット親善の最盛時を示すもので、新聞でさかんに報道され、世間の注目を集めた。しかし三度にわたる双方の接触を通じていえることは、ロシア側が（クロパトキン陸相の意向は別として）最初からチベットの打診に控えめに反応し、慎重な態度をとったことである。ロシアの政策立案者はチベット問題に積極的にかかわる気はなく、ましてやチベットを保護国にする意欲もなかった。なぜならそれが必然的に清国との友好関係を損な

い、その上イギリスとの重大な対決につながるからであった。¹⁶⁾

しかしインド総督ジョージ・N・カーゾン（George Nathaniel Curzon）は両者の接近を強く警戒し、一九〇三年末、フランシス・E・ヤングハズバンド大佐（Francis Edward Younghusband）の率いる英印軍をチベットに発進させ、翌〇四年、ラサに進駐した英印軍がチベット代表との間にラサ条約を締結した。ダライ・ラマはロシアの庇護を求めてモンゴルのウルガ（現ウランバートル）に亡命するが、ロシア政府は清朝政府との関係悪化を懸念してダライ・ラマをロシア領内に受け入れず、結局以後の六年間をモンゴル、清で過ごすことになる。¹⁷⁾

なおラサ条約によってチベット政府はイギリスの同意なしに他国の干渉を受け、あるいは利権を供与することが禁じられ、他国の代表者をチベットに入れることもできなくなった。またイギリスはヤートンに加えてギャンツェ（チベット第三の都市）とガルトク（現ガルヤルサ、チベット西部）にも通商市場を開設する権利を得た。その結果、それらに商務官を置いて経済的な影響力を確保するようになる。ただし一九〇六年の英清条約によって、イギリスはチベットの領土を併合し、またはその施政に干渉しないこと、清国も他の外国にチベットの領土または内治に干渉させないことが約束された。

さらに一九〇七年、英露協商が締結される。これはそれまでのイギリス、ロシアの対立を抑制し、グレートゲームの終焉を告げたといわれる画期的な条約であった。イギリス、ロシアはチベットの領土保全を尊重し、内政に一切干渉しないこと、チベットに対する清の宗主権を認め、

ラサに代表者を派遣しないこと、鉄道、道路、電信、鉱山、その他の利権を求めず、または取得しないことを約定した。イギリスから見ると、この英露協商は自らの手を縛るものではあったが、それ以上にロシアの浸透を防ぐことができる点にメリットがあった。このようにイギリスはロシアがチベットの内政に踏み込まないようなシステムをつくり、チベットの緩衝地帯化を進めたのである。

一方、英印軍のラサ侵攻に危機感を抱いた清は、イギリスに対抗してチベット東部のカム地方を直轄領とし、さらにチベットを清の一省に組み込もうとした。従来の清朝は表面上チベットに宗主権をもってはいたが、その対民族政策は乾隆帝の「俗によりて以て治む」という言葉に象徴されるように各民族の習俗を尊重するものであった。そうした中でチベットは独自の宗教文化を発展させるとともに、歴代のダライ・ラマが聖俗を兼ね合わせた指導者（法王、元首）として頂点に立ち、その下でチベット政府が自主的に政治を運営した。加えて清朝をつくった満洲人とダライ・ラマは「施主とラマ」の関係にあり、施主の清朝はダライ・ラマに援助を与え、ラマ（上人、上師）は精神的助言者の役を担うという役割分担がなされていた。¹⁸しかしながら清朝末期、この「施主とラマ」の関係は崩れ去っており、一九〇五年に趙爾豊（のち駐藏大臣、四川総督）が指揮する四川軍がカム地方に進撃を開始し、最終的に鍾穎の率いる軍兵が一九一〇年にラサへ入城する。このときモンゴル、清をへてチベットに戻ったばかりのダライ・ラマは、改めてインドへの脱出を余儀なくされた。

以上のようにイギリスの動きがチベットを刺激してロシアに傾かせ、それがイギリスを刺激してラサ侵攻をもたらし、さらにそれが清を刺激してやはりラサ侵攻につながり、そのたびごとにチベットは翻弄された。しかし一九一一年、辛亥革命が発生するとラサに駐留する清兵は混乱に陥り、約一年間の戦いでチベットは残存清兵の駆逐に成功するとともに、新政府設立の準備を進め、一九一三（大正二）年一月、インドより帰還したダライ・ラマが事実上の独立宣言といわれる布告を行った。こうした新事態に即し、同年から翌年にかけてイギリス、チベット、清の間でシムラ会議が開催され、チベットの自治と中国の宗主権が確認されたが、チベットの事実上の独立を認めない中国はシムラ条約の調印を拒否した。一方、インド政庁のヘンリー・マクマホン 國務長官 (Arthur Henry McMahon) は、ブータンの東側にあるチベット・インド国境線を北のチベット側に移動させた「マクマホン・ライン」を提案し、中国の反対を受けたもののチベットの同意を得た。

その後、カム地方では戦闘が継続したままであったが、一九一七年になるとチベット軍が優勢となり、同地方の首都チャムド（昌都）駐屯の中国軍が降伏し、翌一八年、イギリスを含む三国代表によって停戦協定が成立した。しかしそれでも戦いは終了せず、最終的には一九二一年の休戦協定によって戦闘はようやく完全に停止した。こうしてチベットの混乱は収まったが、最終的に英露中三国の中でもっとも大きな影響力をチベットに保持したのはイギリスであったことをおさえておきたい。以後、ダライ・ラマはイギリスの内政干渉を受けることはなかったにせよ、

同国の影響下にチベットの近代化をはかることになる。

なお付け加えるならば、その他にフランスもチベットをめぐる国際政治のチェスボードに顔をのぞかせたことがあった。もともとカム地方ではフランス人宣教師が布教活動を行っていたが、ドライ・ラマは一九〇八年の五台山（山西省のチベット仏教霊山）滞在時、チベットでのカトリック布教さえも認めてフランスと公式な関係を結びたい意向を表明した。これに対して当初フランス政府はチベットとの交渉開始に意欲的であった。しかし間もなくこの接近は、清仏関係（清とインドシナとの国境安定、護理（代理）四川総督の趙爾豊に依存する宣教師の安全）に害を及ぼすとともに、フランスが三国協商を結んでいるロシア、イギリスとの関係も悪化させる危険があると判断され、取り止めることになった。¹⁹

それと同じ時期、ドライ・ラマは西本願寺の大谷尊由と有名な五台山会談を行い、日本にもシグナルを送っていた。²⁰ 英露清の狭間で生存をはかるドライ・ラマは、日本、フランスをチェスボード上に引き込み、カウンターバランスとして利用しようとしたのである。

チベットが置かれた国際的な位置関係は以上のようなものである。そうした中で英露清に続く第四の勢力といふべき日本はどのような動きを見せたのであろうか。つづいて日本の動向とその諜報工作活動を追ってみたい。

二 第一次諜報工作と成田安輝

前章で見たようにチベットをめぐる列国の利害と思惑が交錯する中で、日本（外務省、参謀本部）はこれをどのようにとらえていたのだろうか。管見の及ぶ限りでは、遅くとも一八八〇年代よりチベットは日本の関心対象に入っていた。

一八八六（明治十九）年、チベットへの通商拡大を試みる英領インド政庁は、コルマン・マコーレー (Colman Patrick Louis Macaulay) を団長とし護衛兵をとまなう遠征隊のチベット派遣を計画した。イギリスは芝罘条約（一八七六年）によって清の駐藏大臣による状況判断という条件つきながら、チベットに遠征隊を派遣する権利を得ていた。しかし清朝はチベット人の反英感情を気遣ってそうした試みを拒む傾向があり、マコーレー遠征隊のシッキム集合を知らされたチベット人が武装反乱を起こして抵抗すると、イギリス側に派遣延期を依頼した。その結果、計画は中止されるが、遠征隊の存在に刺激されたチベットはシッキムとの国境線に軍隊を送り、それが一八八八年の英印軍によるシッキム侵攻につながることになる。²¹

右のマコーレー遠征計画は芝罘の日本領事館から外務本省に報告された。²² これを受けて井上馨外相は北京の日本公使館に対して、もしチベットに通商が開かれれば「自然我国通商等ノ利害ニモ致關係」すため、事実の有無ならびにその他詳細を調べて報告するようにと訓令した。²³ そこ

で北京の日本代理公使は同地のイギリス代理公使に面会し、イギリス政府がまずチベットの実況調査を行った上で清朝政府に通商を請求するつもりでいることを確認している⁽²⁴⁾。このように日本は早くからチベットをめぐるイギリスの動き、経済的進出に比較的敏感に反応していた。

また一八九三年、イギリスがヤートンに市場開設の権利を入手すると、北京の日本公使館は次のような報告を送っている。チベットに駐在する清兵はわずか一、五〇〇人にすぎず、これに対してインド政庁の軍隊は二一万八、〇七五人で、ダージリンからシッキムへの行程は二日である。英印軍がチベットを「保護」するのは容易であり、シッキムを根拠地としてチベットに「侵入」するのは「高屋建瓴ノ勢」(高い屋根から水がめを傾けたときのように妨げることが不可能)である。一方、チベット駐屯の清兵は本隊から遠く離れ、「長鞭馬腹ニ及バザルノ勢」(鞭が長すぎると馬の腹を叩くことができないうように、いかに力があってもどうすることもできない状況)であるという⁽²⁵⁾。イギリスのチベット侵攻の可能性をほのめかすこの報告書は外務省から参謀本部にも回されている⁽²⁶⁾。

しかしながら外務省、参謀本部がチベットに本腰を入れて関心をもつようになったのは、日清戦争後、西洋列強の清国分割がはじまった一八九六年から九七年にかけての時期であったと考えられる。一八九六年、ロシアは李・ロバノフ密約(露清同盟条約)によって東清鉄道敷設権を獲得し、シベリア鉄道との連結をめざしていった。同年、フランスも龍州鉄道の敷設権を得てハノイから広西省への進出をもくろみ、ドイツは山東半島南部の膠州湾租借を要求した上で翌九七年にこれを軍事占領し

た。さらにイギリスは九七年にビルマ鉄道の雲南延長権を入手し、清の南西部に対して通商拡大をはかろうとした。一八九八年にはこうした動きが一気に加速化し、ロシアが旅順、大連、ドイツが膠州湾、イギリスが威海衛の租借権を相次いで獲得し、フランスも広州湾を占領して九九年にその租借権を手に入れたことは周知のとおりである。

右のように一八九六年から九七年にかけて列国が清の各地で勢力拡大に乗り出したことは日本の指導層に強い警戒心をもたらした。参謀本部は清帝国の行政区域を大きくいって五つの地域に区分してとらえていた。すなわち、①本部支那(十八省)、②満洲、③蒙古、④伊犁(新疆)、⑤西藏である⁽²⁷⁾。このうち、①本部支那、②満洲で列強の利権争奪戦が始まったとすれば、今後それ以外のモンゴル、新疆、チベットでも勢力圏分割のドミノ現象が起こり、北からロシア、南からイギリスが浸透して清帝国の存在そのものが大きく揺り動かされることが予想された。本稿のキーパーソンであり、参謀本部の諜報工作活動の中核を担った福島安正は「優勝劣敗、弱肉強食という世界の大勢」の中で清国分割を進める第一の脅威をロシア、第二の脅威をイギリスとし、このまま進めば清はついに列国が思うままに割拠する悲境に陥るだろうと懸念しているが、日本側はこの福島が抱くような危機意識にもとづいてチベットにも関心を払い、情報収集を行うとともに工作(関係強化による影響力の扶植、要路者の懐柔・抱き込み)をしかけていくのである。また福島の下、現場で実際の活動にあたった民間人の成田安輝、寺本婉雅も類似の危機感をもち、列強による清国分割がさらに進み、チベットがロシアやイギ

リスの支配下に落ちて清の弱体化を促進し、その余波が日本に及ぶことを恐れており、これが彼らをしてチベット潜入を決意させた重要な原動力となっていた。²⁹ すでに見たように実際にはロシア、イギリス両政府にチベットを併合する意志はなく、今日から判断すれば成田や寺本の見方は杞憂であったともいえる。しかしそれは後知恵であって、東アジアにおける激動を目前に見ている彼らにとって、チベットをめぐる英露の勢力獲得競争のイメージは決して夢や幻とは考えられなかったのである。

以上のように一八九〇年代から一九〇〇年代初頭にかけて、チベットはアジア全体のパワーバランスに影響を及ぼす震源地の一つである。一部の日本人から認識されていたが、鎖国状態にあるため、その内部から得られる直接情報はほとんどなかった。そこで外務省は一八九七年、民間人の成田安輝（一八六四—一九一五年）を調査員としてチベットに派遣することを決定する。成田は陸軍士官学校を病気で退学した後、日本、アメリカ、台湾を転々としながら実業に携わっており、恐らく士官学校の関係者を通じてチベット行を志願したと推測される。³⁰ その結果、成田派遣は大隈重信外相が提議し、次の西徳二郎外相のときに決定され、樺山資紀海相、小村寿太郎外務次官、福島参謀本部第三部長（運輸・通信担当）の賛同を得て、外務省が中心となって実行に移された。³¹

一八九七年十二月、西外相、小村次官の承認を得た成田は日本を出発し、最初の一年間は重慶に留学して四川語を学び、その上で満五ヶ年（出発の日から帰朝の日まで）を期してチベットに赴く予定であった。

開設して間もない重慶の日本領事館で補助業務にあたり、現地の人々に

日本語を教えながら成田はチベット東部からの潜入をねらって四年間を過ごしたが、国境のガードが厳しかったため、一九〇一年一月よりルートを変更し、インド経由に変更し、同年十二月、清国商人の名目でラサに入った。ただしラサでの滞在は十八日間にとどまった。³² なお成田の派遣は外務省によるものであったが、成田が現地で旅費に窮した際、重慶駐在の井戸川辰三大尉や参謀本部第二部長の福島大佐（のち少将）に送金を訴える場面があり、先行研究は成田の本当の資金源は参謀本部にあって、外務省は送金その他の便宜上の隠れ蓑ではなかったか、あるいは成田の資金が外務省と参謀本部の両方から出ていたのではないかと疑問を呈している。³³ いずれにしても成田は外務省だけでなく参謀本部の福島のラインともつながっていた。³⁴

まず成田の諜報活動について述べる。チベット潜入前、清国滞在中の成田が外務省にもたらしたチベットに関する主な政治外交、軍事情報を見てみたい。最初の例は一八九九年の報告である。³⁵

① チベットから清国に帰った者の話によると、ダライ・ラマは一八九五年にロシアと内通し、現在、ロシアの武官三名、商務官一名、陸兵数名がダライ・ラマ法王の下にいる。またラサではロシアの職工が大砲を鑄造している。法王はロシア人の援助によりチベットを防衛しようとしているが、これは虎を部屋に引き入れるもので、その虎が自分を食おうとしているのに気がつかず、愚かなことだ。

② 一方、清の駐蔵大臣（正副二名）はチベットのことに習練を積まず、対外交渉においてもほんやりとして決断しないため、駆け引きは難しい。兵隊は数が足りず、その半分は形だけで中身がなく、これによって外敵を防ぐことができようか。

右のように成田は、ダライ・ラマがロシアの軍事援助を受ける一方、清朝側にそれを防ぐ手立てがないことを伝えた。これはチベットから帰った清国人の話を、さらにその友人の清国人（成都在住）から聴取したというもので、二重の間接情報であり、ダライ・ラマは一八九八年にドルジェフをロシア皇帝の下に派遣したものの、現実にはラサにロシアの軍人や商務官が駐在しているという事はなかった。しかしその後、ドルツェンドの軍糧府庁長・劉仁斉から受け取った書簡と照らし合わせてロシア、チベットの蜜月関係がつくり話ではなさそうだと判断した成田は、その旨を記した報告書を外務省に打電するとともに、これを福島第二部長にも回すよう要請した。それを受けて外務省は成田の電報を福島大佐に転送している。³⁹

次の例は一九〇一年の報告である。チベット潜入ルートを東チベットからインド経由に変更した成田は上海に赴いたが、同地のキリスト教青年会（YMCA）でチベットから帰還した沈錫候なる人物（元西藏印度国境勘定委員会繙訳委員）の英語講演を聞き、そこから得た情報を外務省に伝えている。重要部分を整理してまとめると以下ようになる。⁴⁰

① 国境警備……チベットは五年前にヤートンを開き、そこにシナの税官吏ならびに英人一名が配置され、商品の出入りを登記している。チベット国境の中でヤートンのもっとも嚴重で、大絶壁の間に城壁が築かれ、チベット人が約四、五百名、シナ人（多くは兵卒）が約二、三百名おり、ラサまでは十六、七日ほどの距離にある。

② 軍事力……ラサには約一千余りのシナ兵がいる。チベット兵は万余あり、僧俗混合で火繩銃を所持する。チベット兵の多くは臆病で兵隊としては価値がない。

③ 清との関係……チベット人はイギリスと一朝有事の際、シナが頼むに足らないことを看破しており、昨春秋、サンクトペテルブルクに贈物を携えた使者を派遣した。シナはチベットで大いに信用を失いつつあるようである。

④ ロシアとの関係……ロシア人はつねにチベットの機嫌をとる政略をとっている。往年、あるロシア人はチベット人を通じてダライ・ラマに、もしイギリスがチベットに難を構えることがあれば、ロシアはチベット救援を躊躇しないと申し込んだ。

⑤ イギリスとの関係……イギリスはチベットに迫ってヤートン以北のパーリを貿易場にしようとし、チベット人はこれを許せばイギリ

スガ必ずヤートンからパリーまでの地域領有を試みるだろうと強く嫌悪している。イギリスがこうした態度であるため、チベット人はロシアに向かう傾向にある。

⑥ チベットの将来……現今のような形勢をそのままにしておけば、チベットは将来ついに露英の分割に終わるのみである。

右のように成田はチベット兵が頼りにならない一方で、チベットとロシアが接近中であること、イギリスの北進を警戒するチベット側がますますロシアに傾く傾向にあることを指摘した。これも清国人からの間接情報で、チベットがロシアに期待をかけている様子は事実に近いが、「ロシアはチベット救援を躊躇しない」と述べたというロシア人がどのような地位にある人物なのかは定かではなかった。

以上二つのサンプルに見るように、重慶や上海など清国滞在中の成田から東京に送られたチベットの政治外交、軍事情報は、他者からのヒアリング、あるいはここで例示はしていないが『北清日報』(North China Daily News)やロンドン『タイムズ』(Times)など他の地域でも入手できるような新聞記事にもとづくものも多く、ヒアリングが重要な手段であることはいままでもないが、直接チベットで入手したのではないだけに確度が落ちるといふ傾向があった。

もちろんその後、インド経由でチベットに入った成田は正確な一次情報を得ており、例えばヤートンの関門を通過した際には、その状況(城

塞と砲台があるが、清とチベットの守備兵は二十余名にすぎない)を記録して先の報告を訂正する形になっているほか、ヤートンから七日目の地点にある靖西軍糧府の状況(兵丁五名、巡丁四十名)などもおさえてい³⁹⁾る。またラサに入る直前まで所持していたカメラで写真も撮影しており、そうした記録は帰国後に外務省、参謀本部にもたらされ、何らかの形で活用されたであろうと推察される。

しかしながら一八九八年末から一九〇二年の帰国まで四年以上の歲月、八二六〇円以上という当時としては相当高額の資金を費やしたことを考えると、その集めた情報の質と量には問題があったといわざるを得ないのでないだろうか。もちろんその中には今日残されていないものもあるうし、成田は外務省との通信以外に福島にも直接書簡を送っているため、そこにもチベット情報が記されていたであろうが、少なくとも外務省への報告を見る限り、政治外交、軍事関連のめぼしい情報といえ⁴⁰⁾ば先に掲げたようなものとなる。もっとも当時チベットへの潜入自体が難しく、またラサでの滞在日数が限られていたという悪条件を考慮する必要があろう。ただしこの問題については彼の置かれた環境だけが理由となるわけではない。なぜなら重慶での成田は大陸浪人的、志士的な活動に走りがちで、現地の日本外交官から擧蹙をかうこともあり、外務省に送る公電も客観的事実というよりは、自分の政治的意見を押し出すケース(たとえば日韓清の大東合邦論、四川省の鉱物採掘権獲得、重慶市内での日本人居留地経営、北清事変における日本の講和条件などの提案)が少なくなかった。しかもその目立った言動のため成田がチベット潜入

をめざしていることは重慶で多くの人々に知られており、日本の武官が変装しているのではないかと疑われたほか、チベットに赴任途中の新任駐蔵大臣・慶善に成都で会見した際も、同大臣からイギリスが日本に依頼したスパイではないかとの疑惑を向けられた。⁽⁴²⁾

つまり成田には、本来の任務である情報収集に専念せず、別の方向にエネルギーを注ぐ、あるいは客観的な事実を集めるよりも主観的な自己主張に向かうという傾向があった。またその経歴からうかがえるように、彼は小笠原諸島からアメリカ（アラスカ、西部）、台湾にいたるまで職業、任地を転々としており、一面において行動的であったが、その反面一ヶ所に腰を据えて集中するのが苦手な性格の人物であったと考えられる。清に滞在中も二度にわたって外務省に一時帰国を申し出て拒絶されているが、どちらの場合も日本に帰る客観的根拠があったとは考えられない。⁽⁴³⁾さらに四川語を学んだため、清国人に変装してラサに入ることができたのはよかったが、のちの寺本婉雅のケースから明らかなように、チベット人社会に入り込むにはチベット語、モンゴル語の方が有利であった。

要するに成田は諜報担当者としての条件、適格性を十分備えていたとは言いがたく、そのため月日と資金に見合った成果をあげることができなかったのではないかと考えられる。ただしこの点については外務省、参謀本部にも問題があり、調査員を送り出すにあたって厳密な選抜を行い、あるいは相応の訓練、準備を積ませていなかったことがうかがえる。この時期においては、日本当局のチベットに向けた取り組みはまだ暗中模

索の初歩的な段階にあったといえよう。

次に成田の工作活動について述べる。清国滞在中の成田は、チベット潜入後にダライ・ラマをはじめとするチベットのリーダーに接近して親交を深めるといふ工作を企図していた。ただしそれは当初から計画していたのではなく、清国に渡ってから思いついたもので、重慶での成田はこの件について加藤義三領事と相談している。その結果、加藤領事は成田のチベット行ができるだけスムーズに進むよう彼に公式の肩書をもたせるため、また将来成田がチベットに到着した際、「或は喇嘛執政等に面見するの機会もあるべく」と考え、そうした事態に備えて東本願寺の大谷光瑩法主からダライ・ラマあての親書を出してもらおうよう外務本省に東本願寺との交渉を依頼した。それに対して本省も「事情御尤の次第」として親書の入手と領事館への回送を約束した。⁽⁴⁴⁾さらに加藤領事は成田が作成したダライ・ラマ、駐蔵大臣、チベット宰相への贈呈品リストを添付し、成田自身も追加のリストを送って、それらも外務省から認められている。⁽⁴⁵⁾その後成田はチベット行の準備を進める中でダライとの会見を念頭に置き、英露のうちいずれかがチベットを侵略する前に、同じ人種のよしみをもってこの「可憐ナル大法王」に「一忠告」をいたし、わが国の好意を知らしめたい、「同洲、同教、同種ノ西藏迄ハ支那同様我国ト関係ヲ密接ニセシメシコト我国ノ得策ナリ」と述べている。⁽⁴⁶⁾

右のように成田はダライ・ラマへの接近を考え、それを加藤領事が支援し、外務省も承認した。その目的にしたがい、一九〇一年十二月の十八日間、ラサに滞在した成田は、到着するとすぐに法王へのアプローチ

を試みている。このとき彼は駐蔵大臣衙門の清朝官吏の伝手をたどって
 ダライ・ラマの通訳官への接触に成功し、その人物からダライ・ラマへ
 の謁見はかなわれないが、宰相総堪布（堪布＝ケンポは高位学僧の称号）
 に紹介するといわれ、ポタラ宮に案内された。⁽⁴⁸⁾この宰相総堪布とはチベッ
 ト政府の内閣四名のうちの僧官閣僚チキヤブ・ケンポ（chikyap
 Khempo or Chikyap Kempo）であり、宗教面の政治、経済その他に
 ついてダライ・ラマに次ぐ最高責任者であった。⁽⁴⁹⁾しかし成田の「進蔵日
 誌」はポタラ宮に入り、宮殿内の装飾や仏像の壮麗を描写したところで
 終了しており、さらにその奥へ進んで宰相総堪布と実際に面談した場面
 は記されていない。したがってそのとき成田が宰相総堪布に何を話した
 かは想像の域を出ず、そもそも彼が実際に会見を果たしたのかどうかと
 いうこと自体、資料の制約上、現時点では断定できない状況にある。⁽⁵⁰⁾

以上の工作活動の過程からうかがえるのは準備不足ということである。
 チベット指導層への接近を思いついたのはよいが、出発前にそれを想定
 しておらず、重慶に着いてから用意をはじめている。その際に成田が外
 務省に要請した贈呈品のリストは、ダライ・ラマあての経典、袈裟、服
 地、水晶数珠、日本地図、駐蔵大臣あての日本刀、宰相あての日本刀、
 服地、水晶数珠であり、さらに追加で出したリストは、ダライ・ラマあ
 ての写真帳（皇居、日光その他の名所風景、観兵式、演習、軍艦、大製
 造所など彩色したもの）、大谷光瑩の真影といったものであった。⁽⁵¹⁾

これらを見ると、仏教という共通の宗教によって日本、チベットの関
 係をアピールするとともに日本の軍事力、工業力の偉容を示そうという

意図がうかがえる。日本が近代国家、列強の一つであることを知らしめ
 ることで大国の圧力に悩むチベットを引きつけようというわけで、その
 目標は戦略的かつ明確であった。しかし鎖国体制にある当時のチベット
 では日本人であることを明かすこと自体が危険なことであり、その上で
 ダライ・ラマや側近に接触するというのなら、渡航前に外務省や参謀
 本部の担当者と相当の下準備を行わなければならないはずであったが、
 そうした形跡はうかがえない。ただし問題は成田にだけあったのではな
 く、成田から贈呈品の用意をリクエストされて簡単に承諾した外務省に
 もチベットに関する基本知識が不足していたわけであり、そもそも彼の
 出発前に活動の方針と実施計画について入念な打ち合わせを行うべきで
 あった。この点についてもやはり日本当局のチベットに向けた取り組み
 は初歩的段階にあったといえよう。

結局、外務省は諜報工作担当者としての適性が十分とはいえないアマ
 チュア的な人物を準備不足のまま送り出したのであり、結果は当然それ
 に見合ったものとなった。⁽⁵²⁾一方、成田に先立ち一九〇一年三月、日本人
 として最初にラサに入った河口慧海は、皮肉なことに仏教の研究と修行
 が目的であったにもかかわらず、高度な情報収集に成功している。ラサで
 日本人であることを隠したまま医者として高い評価を受けるようになって
 た河口は、侍従医長から厚遇された上、大蔵大臣の別殿に住み、宰相、
 現蔵相、前蔵相や清の駐蔵大臣秘書官などから政府部内や外交上の「秘
 密」を聞くようになった。帰国後に公刊した『西藏旅行記』（一九〇四
 年）によって彼がもたらした情報には、次のような政治外交、軍事情報

も含まれている。⁸³⁾

① 国家意識の欠如……チベット政府の人間は国の利益を犠牲にしても自分の利益をはかる。チベットの外交政略はすべて利害の感情の上において定まるため、外国はこの弱点に突っ込んで大臣をうまく籠絡すれば、ほぼ外交上のことが成り立つような具合になっている。

② 独立心の欠如……チベット人の依頼的根性は一朝一夕に起ったものではない。あるときはインドに、またあるときはシナを頼んで自国の生存を全うしようとした。か弱い婦女子の根性であって少しも独立心というものがない。そうしたチベットの独立はおぼつかない。

③ 軍事力……チベットの人口六百〔五百〕万人中、兵士の数は五千人、シナ兵は二千人である。両者ともに気概がなく、普通人民より劣りはしまいかと思うほどである。ラサの近くに鉄砲製造所があり、火繩銃にかわって新式鉄砲の製造が進められることになった。

右のように、河口はチベット人を動かす意識の次元にまで観察を掘り下げていた。河口がこのような情報収集に成功した理由は、事前の準備はもちろんであるが、それ以前に、まず何よりもチベットをこの目で見たいという好奇心、意志と執念が強固であったこと、ついでチベット語に堪能であったことなどがあげられよう。

河口は当時の近代国家の中でもっとも新しく豊富なチベット情報をもつ人物であったといえるが、一九〇二年、河口がチベットからの帰路、インドで会った日本の陸軍関係者はまだその価値を知らず、しかもこの年締結されたばかりの第一次日英同盟協約の観点から河口との接触を好まなかった。このとき河口はインド皇帝（エドワード七世 Edward VII）戴冠式に参列するためデリーに滞在していた奥保鞞中将に会見しようとしたが、随行者の由比光衛少佐は次のように告げた。あなたが日本人でありながらチベット服を着けてここにいと、いかにも国事探偵であるかのごとく見える。こうしている間にも英国政府の注意を引くことがあるうと思われるから余り長く話すことも好まない。甚だ気の毒であるが早く引取ってもらいたい。このように言われた河口は軽食と馬車の手配をしてもらった上ですぐに退かざるを得なかった。⁸⁴⁾ 由比少佐はイギリス留学経験があり、参謀本部第二部欧州班長をつとめた人物であるから情報の重要性を熟知していたはずであるが、それでも日英同盟の手前、イギリスに気兼ねして、河口にかかわりたくないという姿勢を示したことに留意しておきたい。このイギリスへの配慮は後に見る日本の諜報工作活動の背後にちらつくことになる。

以上、本章では外務省からチベットに派遣された成田の諜報工作活動を検証した。この時期、外務省、参謀本部のチベット関与はスタートしたばかりであり、それを反映して成田の収集した情報は質量ともに高度のレベルにあったとは言いがたく、工作活動面でも準備不足が目立った。しかしそうした諸点は次の時期に入ると、別の人物によって飛躍的に改

善されることになる。

三 第二次諜報工作と寺本婉雅

前章の成田のケースで見たように、チベット現地での生の情報を入手することには困難がつきまといっていた。そうした中で参謀本部第二部長の福島少将が寺本婉雅の協力を得ることにより、日本の諜報工作活動は長足の進歩をとげることになる。チベットに対して工作を行う場合、「宗教力」、すなわちチベット仏教の力が重要かつ必要不可欠のポイントになるが、チベットの言語と宗教を研究し、ラサ入りを念願する寺本はまさに適任の人物であった。

寺本婉雅（一八七二—一九四〇年）は東本願寺の学僧であり、一九〇〇（明治三十三年）、北京で西藏大蔵経を発見し、その寄贈を受けて日本に持ち帰るといふ宗教的、学術的功績をあげ、一九一五（大正四年）から一九四〇（昭和十五年）年まで大谷大学教授としてチベット語、仏教学を教えるなど、チベット学者としての生涯を歩んだ。

ただし明治期の寺本は仏教を通じて日本、清、モンゴル、チベットの提携を強め、それによって西洋列強に対抗し、興亜の実現をめざすというアジア主義的な理想を抱き、それにもとづいて学問のかたわら実践的な活動に従事した。一八九八年七月、寺本は成田安輝より約七ヶ月遅れて神戸を出港し、成田と同様に四川省からチベットへの潜入をめざした結果、翌九九年、同じく東本願寺の僧であった能海寛とともにチベット

国境のバタン（巴塘）に到着した。二人はそれ以上進めなかったものの、チベットの地を踏んだ最初の日本人となる。⁵⁶⁾

その後、寺本は能海と別れ、一九〇〇年四月に日本に帰国し、チベット再旅行の準備を進めた。その際の経緯については、近年先学が発掘、翻刻した寺本の日記『新旧年月事記』に記されている。それによると帰国後の寺本は、五月に谷了然から石川舜台直筆による海軍軍令部・小笠原長生少佐あての書簡（紹介状）を入手した。そこで直ちに京都から上京して小笠原少佐に面会し、小笠原から陸軍の福島大佐（少将）を、さらに福島から外務省の内田康哉政務局長を紹介され、六月に内田と会った際、福島と「一往相談ノ上是非ノ沙汰ニ及フベシ」との回答を得た。

その直前に義和団事変（北清事変）が勃発したため福島は臨時派遣隊司令官に任命され、出征直前に寺本に次のように述べている。一週間前に成田安輝から書簡が来て、駐蔵大臣の僕となって入蔵する計画であることを伝えてきたが、今頃は重慶を出発しただろう、而して「目下清国変乱ノコトナレハ事甚困難ナラン云々」というのである。⁵⁷⁾

ここでいう「事が甚だ困難になるだろう」というのは直接的には成田の入蔵計画を指すものであるが、同時に福島は義和団事変突発のため寺本のチベット行も当分難しくなるだろうと考えたと推察される。しかし福島は寺本に目をかけ、同年八月、寺本は福島を追求形で北京に向けて出立し、義和団事変に出征した第五師団付の通訳をつとめるかたわら工作活動に従事していくことになる。北京での寺本は小村寿太郎公使の命によって清朝皇室と日本の関係につき種々の画策を遂行し、第五師団長

の山口素臣中将や福島少将と呼応して「日本の意企をつんく／＼押進め」たという。例えば西太后・光緒帝の北京帰還、紫禁城・万寿山離宮の露仏兵からの奪回、紫禁城内の宦官救助、北京最大のチベット仏教寺院・雍和宮への蒙古ラマの呼び戻しと日本軍からの米の支給、阿嘉呼図克図（アキヤ・フトクト）の訪日誘致などにあたったとしている。⁸³⁾

以上の過程で福島と寺本の間にチベット工作の青写真が描かれ始めた。と推察されるが、それは当初から次の点で一貫していた。まず福島が存在が背後に見られることで、それが福島、寺本の共同事業であったことがうかがえる。次にその主眼が、日本とチベットの仏教交流を進める中でチベットの指導者に日本の近代化を示すことにより、彼らをロシアから日本側に引き寄せるという点に置かれていることである。つまりロシアア封じ込めの一環としての対チベット友好・親善、懐柔・抱き込み工作であった。

寺本の主な活動は時期を追って以下の六つのステップを踏んでいる。すなわち、(1)チベット仏教の活仏で北京・雍和宮の最高位にあった阿嘉呼図克図の訪日誘致（一九〇二年七月実現）、⁸⁴⁾ (2)クンブム寺（クンブム・チャンパーリン寺、塔爾（タル）寺）における親日派形成工作（一九〇三年二月―五年二月）、⁸⁵⁾ (3)チベット潜入と情報収集（一九〇五年五月―六月ラサ滞任、インド経由で八月カルカッタ着）、⁸⁶⁾ (4)クンブム寺におけるダライ・ラマとその側近をターゲットに絞った直接工作（一九〇六年八月―七年十一月）、⁸⁷⁾ (5)五台山会談の実現（一九〇八年八月）、⁸⁸⁾ (6)ダライ・ラマの使節日本派遣工作（一九〇八年十二月頓挫）である。

まず寺本の諜報活動について述べる。これは右の(3)チベット潜入と情報収集の時期に顕著に表れているので、まずそこから見ておきたい。一九〇二年、二度目のチベット潜入をめざす寺本は福島少将にカメラの手配を依頼し、東乙彦大尉からチベット地図（一九〇〇年に寺本が入手して福島に送った地図をもとに参謀本部が調製したもの）、ならびに寺本がルートに考えていた西寧からラサ地方までの宿駅名を略記した書類を受け取った。⁸⁹⁾ その上で彼は渡清して青海の中心都市、西寧の郊外にあるクンブム寺に二年間滞在し、モンゴル語、チベット語や仏教の研究を進めながらチベット行の機会を待った。クンブム寺はゲルク派（黄教）六大僧院の一つで、清国北西地域のチベット仏教の重要拠点である。一九〇五年二月、クンブム寺を出発した寺本は青海湖をへて北東からのルートでチベットに入り、五月に念願のラサ到達に成功した。⁹⁰⁾ ラサで彼は以下のような政治外交情報を得ている。⁹¹⁾

ゴラ山下の溪流が出るところに銀貨鑄造所がある。先年ダライ・ラマがロシアと通じ、ガーン堪布（ドルジェフ）を顧問として、同国より銀貨鑄造機械を取り寄せた。ガーン堪布が総裁となり、その監督下に水力を利用して貨幣を鑄造したが、「この銀貨は交換率がよいので」同堪布に対する蔵民の信用はとみに高まり、ロシアの勢力は公然、全チベットを圧するに至った。

ドルジェフを通じてチベットではロシアの影響力が増大しているとい

うのである。実際にチベット指導層の中枢において親露派はドルジェフの熱烈な煽動によってもう一派の親清派に優勢を占め、ダライ・ラマに清国からロシアの方を向くように促していた。⁽⁸⁵⁾ 寺本はチベット仏教界の要人、有力ラマを親露派から親清・親日派に変えていくことをめざしており、そうした彼にとってこれは由々しき事態であった。またモンゴルのラマを偽称してチベットに入った寺本はどの寺院に巡礼しても疑われなかった。拝礼のためポタラ宮を訪れた際は、前年ダライ・ラマが英印軍に追われて亡命したため閉門しており、人々の出入りが禁じられていたが、宮中の管理者とダライ・ラマの侍従者たちがモンゴルでのダライの消息を寺本から聞き出そうとし、彼の拝観を特別に許可して案内者までつけて優遇した。このとき寺本は彼らから法王出奔の真相、ロシアとの関係、蔵民のダライ・ラマに対する信仰、ダライおよび蔵民のイギリス・清に対する感情、および蔵民の心が赴く方向を詳細に聞き出し、「宝の山に入りて宝を獲た」と実感するとともに、宮殿の屋上から絶景を眺めることできた。⁽⁸⁶⁾

ラサで二十一日間を過ぎた寺本は一九〇五年六月、同地を出発し、シガツェ、ギャンツェ、ヤートンを経てシッキム王国、インドに入り、八月にカルカッタに到着した後、九月に日本へ向けて出航した。参謀本部の福島少将や東大尉からあらかじめ依頼されていたのである。彼は帰路の道筋において英印軍遠征後のチベットの防備状況、イギリスの浸透状況を探っている。例えばシガツェ（チベット第二の都市）では「常備漢兵百余人、旧銃を帯ぶ。蔵兵百に満たず、弓箭火銃を帯ぶ。操練寧ろ

兇戯に類するものあり」とし、ギャンツェ（第三の都市）では前年のラサ条約によって通商市場が開設された直後のためか、六日間滞在して「諸種の方面に向って調査」を行い、同地の「英領印度兵の携帯せる銃名はENFIELDと云ひ、五連発単弾込にして、弾巢は銃身外にあり。

我邦製よりも小にして、支那五連発と同じやうに見受けらる。英兵今尚此に駐屯せり」と細かく観察している。またパリーでは「今は残砦に印度兵籠りぬ。兵数一百余、士官一名英人二名駐在す。電報局を設く」とし、そこから南下して国境地帯のチュンビ溪谷（ヤートン）では「英領印度兵此に駐屯す。谷川の左を開鑿し、仮兵舎を築き兵一百十二名、英人の兵若干、蔵人の使丁百余名あり」と記録した。さらにシッキムの首都ガントクでは「印度兵二百余、工夫三百余あり。皆婦女を携ふ」と記している。⁽⁸⁶⁾

なおガントクからインドのカリンポン、ダージリンを経て一九〇五年八月、カルカッタに到着した寺本は、そこから約一、八〇〇キロ離れたシムラ（英領インドの夏季首都）に出向き、初代インド駐劄武官として赴任していた東乙彦少佐に会って「厚遇」された上、カーゾン総督、スチュアート・M・フレイザー（Stuart Milford Fraser）インド政庁外務次官と会見して「歓迎」「歓待」された。⁽⁸⁶⁾ これは前章で見たように一九〇二年の第一次日英同盟協約成立直後、河口慧海がデリーで由比光衛少佐から敬遠されたのとは対照的であった。寺本がインドに入ったのはちょうど第二次日英同盟協約が調印された直後で、防守同盟から攻守同盟に関係を発展させた日英両国は蜜月状態にあった。寺本が遠路シムラ

のインド政庁まで足を運んだのは、同政庁から日本領事館や東少佐を通じて、チベットについて話が聞きたいとの依頼があったからではないだろうか。当時、イギリス人がラサを訪問することは原則として不可能であり、そこでの一次情報はどのようなものであれ貴重であった。なお、ほぼ同じ時期に日本とイギリスは日英同盟の情報協力にもとづき、ロシア浸透の恐れがある地域に分担して調査要員を派遣している。すなわちイギリスはインド国境から新疆省カシュガルまで、日本は新疆省イリからモンゴルのコブト、ウリヤスタイ、クーロン方面を担当し、外務省から委嘱を受けた東亜同文書院の根津一院長が同校の第二期卒業生五名に要請して一九〇五年より約二年間の現地踏査を行わせたのである。⁶⁷⁾そこから類推して、寺本も日本領事館から日英同盟の一環としてチベットに関する情報（とくにロシア勢力の浸透状況）をイギリス側に提供することを頼まれ、それだからこそインド政庁から歓迎されたのではないだろうか。⁶⁸⁾

右のような経緯をへて、寺本は一九〇五年九月、カルカッタを出航し、十月に帰国して小村外相に報告を行ったほか、参謀本部でチベット、モンゴル問題について講演し、十一月には大本営に報告書を提出した。⁶⁹⁾チベットならびにその帰路における彼の情報収集活動は、参謀本部および外務省と密接な関係にあったわけである。

さらに翌一九〇六年より(4)クンプム寺に戻ってダライ・ラマとその側近に直接工作を開始して以来、寺本の諜報活動は質量ともに著しくレベルアップした。とりわけ(5)一九〇八年八月の五台山会談の実現から(6)ダ

ライ・ラマの使節日本派遣工作にかけての時期（同年十二月まで）、彼が北京の日本公使館にもたらした情報は、チベット指導層の中枢に入り込んでいただけに、通常のソースからは得られないものばかりであった。例えばダライ・ラマが清朝政府に面従腹背で、「西藏ノ独立ハ自カラ立チ自カラ主宰スルニ非サレハ英ノ侵略ヲ防ク能ハスト決意」しているといったことは、間近で接している者でなければ実感できないものであった。⁷⁰⁾また寺本はダライ・ラマが一九〇八年十月、北京の頤和園仁寿殿で西太后、光緒帝に謁見したときの具体的な模様を聞き出しており、⁷¹⁾同年十二月、ダライが北京を発ってラサに向かった際にはその出発日やルートを正確に把握していた。⁷²⁾その他にもダライ側近の「親露党」（親露派）の代表であるドルジェフとロシア側との間でサンクトペテルブルクにチベット仏教寺院を建立する計画が進んでいることをいち早くキャッチしたが、これはチベットをロシアから引き離そうと腐心する日本側にとつて重大事であった。⁷³⁾この寺院建立計画を寺本はダライ・ラマの特使でロシア派のラブチャンバの密告により入手している。その際、ラブチャンバは寺本に対して涙を流しながら、自分は仏教に尽すため日夜法王に奉仕しているが、将来チベット問題がどうなるか大いに疑わしいと語ったという。⁷⁴⁾こうした寺本の集める深い内容の情報は北京の日本公使館経由で外務本省に送られた。その情報収集力は非常に高いレベルにあったといつてよいだろう。

以上、寺本の活動段階の(1)から(6)のうち、(3)(5)(6)の時期を中心にその諜報活動を概観した。次に彼の工作活動について述べる。これについて

は、やはり(4)クンブム寺におけるダライ・ラマとその側近をターゲットに絞った直接工作から、(5)五台山会談の実現をへて、(6)ダライ・ラマの使節日本派遣工作にいたる流れがもっとも重要である。それが寺本の工作の発展と帰結を示すクライマックスの時期に相当するからである。このプロセスをたどってみると以下ようになる。

一九〇六年八月より寺本は一年余りにわたってクンブム寺に二度目の滞在を行った。そのねらいは同寺を訪れたダライ・ラマに直接工作をかけることであった。このとき寺本を支援して送り出したのは、兎玉源太郎大將(参謀総長)、福島少将(参謀本部次長)、小村寿太郎(元外相、枢密顧問官)、大隈重信(憲政本党総理(党首))であり、とくにその中心にあったのが福島で、彼を通して資金が供給された。⁽⁷⁶⁾十一月、寺本はダライ・ラマへの拜謁に成功し、以来、ダライ・ラマとラーマン堪布(侍従医長、法王の最側近でもっとも影響力があるとされた)、チチャブ総堪布(総理大臣)、ロンネルチェンポ(次官)などの側近に接近していった。⁽⁷⁸⁾翌〇七年に入ると寺本の影響でチベット側に、日本に使節を派遣して宗教、政治、軍事などの文明制度を調査させることに賛同する潮流が生まれた。⁽⁷⁷⁾

そうした中で寺本は一九〇七年十一月の時点で次のようなシナリオを描いていた。①ダライ・ラマをクンブム寺からチベット仏教の聖地である山西省の五台山に移動させ、そこで日本の「大宗教家」と親交を結ばせる、②さらに五台山から北京に参内させ、清朝政府との関係を円満にするとともに「日本の威力」を目撃させる(具体的には日本の清国駐屯

軍を見せることだと考えられる)、③同時にダライ・ラマの「幕下」を日本に來遊させて近代化の成果を見聞させる、④以上によってそれまでロシアに傾いていたダライ・ラマの心事を一変させ、日清両国の側に傾かせることによって東亜の平和を保障するというのである。要するにチベットを親ロシアから親清・親日に変えて東アジアの安定をはかるというわけである。⁽⁷⁸⁾

その結果、まず実現したのが翌一九〇八年八月の五台山会談であった。五台山菩薩殿においてダライ・ラマと西本願寺法主・大谷光瑞の連枝(弟)である尊由が会見し、チベット仏教界と日本仏教界の象徴的交流が現出されるとともに、両者の間で留学生の交換につき合意がなされた。⁽⁷⁹⁾この会談に先立ち、寺本は大連で北京駐劄武官の青木宣純少将、東京の福島中将と打合せを行い、日本では福島中将が光瑞、西本願寺と連絡をとり、現地では寺本が準備を進めた。⁽⁸⁰⁾

次に五台山会談後、ダライ・ラマは寺本が望んでいたように北京に赴き、十月、西太后と光緒帝に拜謁した。この北京において寺本が最大の目標にしたのは、かねてからの課題であったダライ・ラマの使節を日本に派遣させることであった。しかしこの工作は最後の局面で中止することになったため、先行研究もその理由を中心として考察を加えている。⁽⁸¹⁾ただしそこには多少の混乱や誤解が見られるので、先学の提示した資料に加えて寺本『西藏蒙古経営私議』を用いながら、その過程を順序立てて再現した上で中止の理由を再考してみたい。

まず一九〇八年五月以来、参謀本部と西本願寺の大谷法主の協議の上

で、ダライ・ラマを日本に観光させるか、それとも重要な幕僚を渡航させるか、その一つを努力するよう寺本は依頼されていた。⁸²⁾ 派遣費用は参謀本部と西本願寺が話し合った結果、西本願寺が全額を支出することになった。しかし西本願寺がダライを「担キ出シ其名声ニ依テ西本願寺ノ為ニセント謀」ったため、秘密行動を必要とする参謀本部の趣旨と合わず、両者に意思の疎通を欠いた結果、西本願寺は支出を拒絶するに至った。そこでダライないし幕僚のどちらであっても来日が不可能になり、その仲立ちをしていた寺本は十月末の時点で身体窮まる事情に陥り、政府と参謀本部は口のみ大にして実行し得えることもなさないと憤慨することになった。⁸³⁾ 使節派遣計画はこの十月末の時点で一旦中止となったわけである。

一方、ダライ・ラマの訪日については北京の日本公使館が反対した。寺本がこの件について公使館にはかったところ、当局者「伊集院彦吉公使」は「日英同盟上の感情を害ふのみにして何等の利益の見るべきなし」とし、また「現時日本の対清政策上斯ることは宜しからずとの一言にて」中止された。⁸⁴⁾ このように伊集院公使はイギリス、清国との関係悪化を懸念してダライ訪日案を退けたという。

しかしダライ・ラマが日本を頼りにするのを見た伊集院公使は、使節の派遣には賛同した。⁸⁵⁾ 伊集院は「公使館に」ラーマン堪布を招き、その際伊集院から「真摯ナル要晤」を聞いた堪布は「心中大ニ感シ」てこれをダライ・ラマに伝えた。ダライはそれを聞き及んで意を決し、以下のように回答してきた。自分がチベットに帰ったのち、①有徳聡明なラマ

一名を派遣して留学させる。^②最高貴族一名を派遣して日本の文明、ことに教育・軍事・農業・鉱業を視察させる。^③その貴族の愛子を日本に残して留学させる。そのため日本側で便宜をはかってほしいというのがダライの返答であった。⁸⁶⁾

しかしながら費用の用途はつかないままであった。寺本がダライ・ラマ側とさらに話し合った結果、十一月二十八日に先方から次のような決定が示された。すなわちチベット側から使節二名、通訳一名をできるだけ迅速に派遣し、往復四十日程度の予定で実施して、ダライ・ラマが北京に滞在している間に彼らを戻したいというのである。⁸⁷⁾ 翌二十九日、寺本はこのチベット側の希望を北京駐在武官の青木少将に伝えて協議したが、「其方法ニ於テ妥結セズ激論」となり、福島中将に事情を打電して取捨の判断を乞うことになった。⁸⁸⁾

その際に青木から寺本に示されたものであると推察されるが、参謀本部は派遣事業自体については「大賛成」だが、「単独ニ遂行スル程ノ勇氣ト運動費ト有セス」といった態度であった。⁸⁹⁾ 単独で遂行する勇氣がないというのは、西本願寺がチベット使節を受け入れるならば、それが海外に知られても宗教上の交流であると言い逃れができようが、参謀本部が単独で行ったことが外部に漏れれば国際問題になるのでそれはできないという意味であろうか。加えて費用については「武官室ニテハ一文モ不出」ということであった。⁹⁰⁾ これに対して寺本は、参謀本部が使節三名従者とも五名を日本に観光させるべく勧めておきながら、これを実行できないというのは甚だ遺憾に堪えず、参謀本部が出金しなければ中間

に介在する自分はダライの信用を失墜する。そこでやむを得ず自分が費用の半額を負担するから、半額は当局が支出すれば事は円満に行われると述べた。⁹¹⁾

一方、特使の派遣に賛同していた伊集院公使は、事の起こりが福島中将など参謀本部に始まったことなので、賛成といっても費用の半額とまではいわないものの、五百円は補助するという意を洩らした。寺本はこの五百円を含めて使節の片道費用千五百円を北京で集めることにした。他方、使節の二ヶ月間の日本滞在費（兵政教育、鉱山、製鉄業、寺院などの参観を想定）については途がなかったため、大隈重信、松浦厚、戸水寛人に依頼を伝えた。⁹²⁾

使節派遣の実現をあきらめない寺本は、十一月三十日夜、ラーマン堪布と詳しい相談を行った。チベット側は清朝政府の監視を気にして、できるだけ気がつかれない形ですみやかに実施したかったのである。寺本はラーマン堪布に、清国官憲の猜疑心を免れたいならばダライ・ラマの出立を待つて派遣するの可である旨をアドバイスした。⁹³⁾ また寺本は、大隈、松浦、戸水に依頼の可否を催促する書簡を送った。⁹⁴⁾

その後チベット側から、特使を十二月二十一日に「蒙古人として」「蒙古人に偽装しての意か」北京から出発させ、それと同時にダライも同じく北京を出立してチベット帰還の途に就き、青海に滞在して使節が日本から帰るのを待つという通知がもたらされた。この急な知らせに接した当局者「伊集院公使」は事が余りに容易に進捗したのに「狼狽周章」して「其特使歓迎入費支出の路なし」として一時これを中止しようとする

し、ダライに「光緒帝、西太后が崩御して以来清国政府は万事に猜疑心をたくましくしており、特使が帰来する時期がよろしくない」との理由をもって断るよう寺本に命じた。寺本はすでに特使来日の旨を相互に約しているにもかかわらず、旅費支出の途なきをもって単に時機宜しからずとの理由で断るのは不穩当であると考え、「多少の議論を当局者と戦はした」が、結局断念した。⁹⁵⁾

その結果、十二月十日ないしその直前、計画の中止が確定的となった。⁹⁶⁾ 落胆した彼は次のように記している。「達頼使節ヲ渡日セシムベク一度決定シタル参謀本部ト西本願寺トノ間ニ契約ニ齟齬ヲ来シ、一時此問題ヲ中止スルコトナリシカバ達頼ノ使節派遣出發日限迄モ決定セシニ拘ラス遂ニ中止スルコト、ナリヌ。」⁹⁷⁾ ダライ使節派遣は参謀本部と西本願寺の間に契約のくいちがいが生じて一旦中止となっていたが、今回、出發日限まで決定していたのに、ついに最終的中止に至ったのである。

双方の間で板挟みになった寺本は十二月十日から十一日にかけて「非常ノ心労」を尽してチベット側に説明し、伊集院の言葉にしたがい、両宮崩御に際して清朝側の諸注意が綿密であるから暫時延期するほうがよいとの理由をもってダライ側を「僅カニ承諾セシムルヲ得タ」のであった。⁹⁸⁾ その後で寺本は両者調停のため、伊集院公使に勧めて十八日、公使館で晩餐会を開いてもらった。チベット側からラーマン堪布、カンチュンスイベン、および侍従ラブチャンバ、チャンバルチャムソなど三名が招待され、日本側から伊集院、青木少将、小田二等書記官、高尾亨二等

通訳官、寺本が出席し、ダライ・ラマから明治天皇へのハダ〔敬意の印として送る帯状の絹布〕が捧呈され、チベットの剣一振りと麝香が公使に贈られた。⁹⁹⁾

その後で伊集院公使は小村外相に以下のように報告した。ダライ側はいよいよ視察員派遣の決心をなすに至り、その旨を寺本に伝えてきたので、つくづく考えるに両宮崩御後で内外耳目が鋭敏のとき使節を送るのは、ダライに対する清国当局の疑念を生じさせるだけでなく、わが国に對しても面白からざる誤解を抱かされる恐れがある。またイギリス、ロシアも猜忌を起さずとも限らず、自然われに不利益を欲する第三者に離間中傷の機会を得させる嫌いがあるのを免れない。ダライは使者を内密に派遣したい意向とはいえ、現下の時局では清国が往来交通に探偵を怠らないため発覚の恐れが甚だ多く、いわんや本邦における耳目は到底掩うことができないだろう。そのためダライに使者派遣を見合わせ、時局が安固定着するまで待たせる方がよいと考え、寺本に先方へ説かせたところ、わが勧告の通り使節派遣を見合わせる事になった。なお本官はダライ昵近の堪布を招いて上述の趣旨を説き、今後適当の時期にダライから視察員その他学生を日本に送る場合は、「本官ヨリ可成便宜ノ得ラル、様取計フベク必ズ我好意ニ信頼シテ可ナル旨」を語った。そういう次第で帝国政府もしくは参謀本部において西藏との関係接近の必要を認めるときには「何時ニテモ之ヲ実行スルノ余地」を残しておいた。なおダライは来年秋ごろ留学生三名ばかりを日本に派遣する決心で、そのときは便宜を与えてくれとのことなので、もし実行となれば「政府ニ

於テモ相当ノ方法ヲ以テ其目的ヲ達スル様御配慮相成候様致度候」。このように伊集院公使は報告した。¹⁰⁰⁾

それから約二十年后、寺本は当時をふりかえって、ダライ・ラマを日本に觀光させる約束ができたのに、「公使伊集院氏は英露の外交的關係を恐れ、達頼（ダライ）との約束を無視」したため中止となりました、「日本公使が露英の干渉を畏れて約言を破りました」、「日本公使伊集院氏の違約」と「或る人（大谷光瑞氏）のために秘密が暴露した」ためでありますとくり返し伊集院を批判している。ここで寺本は使節訪日をダライ訪日と取り違えているが、要するにダライ・ラマの使節派遣が最終的に中止になった主たる責任者は伊集院公使であり、同人が英露との關係を恐れて先方との派遣約束を破ったからだというのである。

以上の過程を整理すると以下ようになる。①参謀本部（福島）は西本願寺と協議の上、ダライ・ラマまたはその幕僚を日本に派遣する工作を寺本に依頼した。その費用は西本願寺が全額支出することになった。②しかし秘密に事を進めたい参謀本部とダライを公の場に出して活用することを望む西本願寺（このとき大谷光瑞が計画の秘密を洩らしたのであるか）との間で対立が生じ、後者が費用支出を拒絶したため、派遣計画は事実上中止となった。③その後、参謀本部は派遣については賛成するものの単独遂行、費用支出は拒否した。④それでも寺本は工作を進め、金策に苦慮しながらダライ側が特使の出発日程を決定するところまで行きついた。⑤しかしそれは急な日程であったため、使節派遣に賛成していた伊集院公使は光緒帝、西太后崩御直後の北京情勢を理由として

寺本に断らせ、派遣計画は再度中止となった。⑥伊集院は小村外相に事情を説明し、今後留学生派遣の際に政府が便宜をはかるよう希望を述べた。⑦しかし寺本の中には伊集院が英露との関係を恐れてドライとの使節派遣約束を破ったという不満が残った。

使節派遣工作が中止に至るプロセスは以上の通りである。そこで明らかかなことは、まず参謀本部と西本願寺の対立が生じた時点でこの計画は事実上破綻したということである。しかし寺本がそれをあきらめず、また伊集院がそこに関与したため、工作は福島、青木が手を引いたまま継続され、最後は伊集院の判断で中止が決定された。しかしそれ以前に資金調達の目途が立たなかったのであるから、この計画は伊集院の決定如何にかかわらず、実現不可能であったといえよう。寺本は自己の悲願がかなわなかったため非難するが、伊集院の最終判断は後から慌てて理由づけした感が否めないものの、当時の状況を鑑みると必ずしも間違っていないとはいえないのではないか。またドライ・ラマ側も相手方の日本の都合を十分配慮しないまま事を急ぎ過ぎたといえる。寺本も目前の計画実現に焦るあまりに視野が狭くなっていった面がある。さらに青木少将は、結果として寺本の梯子を外したような形になったのであるから、彼の気持をなだめるためのフォローがより一層必要であったのではないか。結局、挫折した寺本自身は心身ともに疲労困憊しながら翌一九〇九年一月に帰国した。日本に戻ってからは第三回目のチベット行を計画していたが、それはついに実現されることがなかった。

以上、一九〇六年から〇八年における寺本の工作活動の軌跡をたどつ

たが、最終的にその総決算というべきドライ使節の日本派遣工作は挫折するにいたった。つづいてこのプロセスにおける以下の諸点を検討してみたい。第一に寺本の諜報工作能力、第二にその特徴、第三に北京の日本公使館（とくに伊集院公使）がドライ・ラマ側に与えた影響である。

第一に寺本の諜報工作能力であるが、ドライ・ラマとその側近に食い込んだ寺本は、法王と「同心異体」にある侍従医長ラーマン堪布、ガーワン堪布（ドルジェフ）以下の法王側近十二名がどのような人物かを調査し、誰が機密に参画しているか、あるいはロシアに通じているかを把握した。とくにラーマン堪布はドルジェフと「共謀シテ達頼ヲ露帝ニ誘引シ、露国ノ後援ニ依テ清朝ニ反抗シ、英ニ対シ独立王国ヲランコトヲ企テシ」前歴があった。そうした親露派が中枢を占める中で寺本は親日派をつくらなければならなかった。

しかも当時のロシア外務省は一九〇七年の英露協商締結によってチベットに対する関心を公式には否認しておきながら、他方でドルジェフを通じてドライ・ラマとひそかに連絡を取り続けていた。この接触の究極目標は「将来のために」チベットの親露傾向を確保することであった。アレクサンドル・P・イズヴォリスキー外相（Alexander Petrovich Izvolsky）はもしドライ・ラマからの要請を断れば、彼は日本の方に向いてしまい、それは隣接するモンゴルにおけるロシアの利益にダメージを与えることになるだろうと指摘している。この発言からロシア外務省が日本側のチベット接近工作を探知していた可能性があることが透けて見える。そこでロシアは一九〇八年、ドライ・ラマから北京行の資金

一 一万銀兩を求められると半年間六・五パーセントの金利で貸し付けを行い、さらに北京に到着したダライ・ラマから追加の二五万兩の借金を要請されるとそれも約束したが、その間、露清銀行、ロシア領事館との交渉はドルジェフが行っていた。さらに清朝皇帝への謁見にあたり屈辱的な外交儀礼(叩頭)を求められたチベット側はロシアの代表から必要な作法を甘受するようアドバイスされていた。同じ時期、のちに触れるようにダライ側は日本公使館にも同じ相談をもちかけていることからわかるように、日露双方に同時にアプローチをかけていた。このように寺本が親露派を日本側に向かせるためには多くの壁が立ちはだかっていた。

クンブム寺ではじめてダライ・ラマに謁見したとき(一九〇六年)から寺本はその側近にチベット改革を進言したが、そのときは怒って拒絶する者、怒りながらも耳を傾ける者、喜んで聴く者など様々であったという。「尤も達頼ノ信任アル」キーパーソンで親露派のラーマン堪布は当初非常に憤っていたが、やがて同一宗教を信じる日本とチベットは相親しむべきであるという寺本の説を聴くようになり、忠告を受け容れるようになった。最終的にラーマン堪布はチベットから留学生や有力な堪布を日本に派遣することに賛同し、ドルジェフもその本心はどこにあつたか不詳であるが、少なくとも表向きは日本からチベットへの留学生派遣を寺本に勧めるほどになった。また寺本は北京で清朝政府や列国の監視を逃れるため、夕刻の指定時間にダライ・ラマの側近たちが黄寺から安定門付近に来ると、そこから馬車に乗せてひそかに日本公使館に引き入れ、館内での晚餐と意見交換が終わると、日本の旅館に宿泊させて翌

朝城外に送り出すなどの工夫をこらした。

このようにダライ・ラマと側近に浸透して情報を集め、親露派の側近を自分の側にたぐり寄せ、同意まで取り付けたその諜報工作能力は相当なものであったといつてよいだろう。またそこには彼の語学力も大きく寄与していたといえる。ただし彼にまったく傷がなかったわけではない。それはまずドルジェフがロシアの指令を受けたエージェントであると考えていたことである。寺本はドルジェフがロシア皇帝から「西藏蒙古懐柔策」を授けられ、ダライに接近すべくラサに留学して侍講となり、ロシアの「大政策」遂行を謀っていると見ていた。しかしドルジェフはすでに見た通りロシア皇帝、政府、外務省と一枚岩であったわけではなく、皇帝からラサに送り込まれた工作員ではなかった。

次に寺本が「露清密約」の存在を信じていたことである。寺本によると、一九〇二年六月にこの密約が締結され、列国を驚愕させたという。彼のあげる同条約の条文五条のうちここで大事なのは以下の三条である。すなわち、(第一条)清国がもし国家の危急に瀕すれば西藏の権利を露国に譲与し、露国はその代価として清国の保全に力める、(第三条)露国は官府を西藏に設け、清国に代わって西藏事務を管理する、(第五条)鉄道鉱山の権はすべて露国の管理に帰するが、清国はまた時に応じて同じくその利権を享ける、の三条である。清が危機に陥った場合、チベットはロシアの保護下に入るといっているのであるが、この露清密約が締結されると、イギリスは急激にチベットに迫るようになったと寺本は記している。

しかし実際には露清密約なるものは存在せず、その風説は清国の日刊紙『チャイナ・タイムズ』(China Times)の報道から始まったが、噂の出所は今日に至るまで不明で、それは一九〇一年のドルジエフのロシア訪問時に検討されたというロシア・チベット協定案が流出したものであるかともいわれる¹⁰⁾。いずれにしてもドルジエフをロシアの工作員とみなし、かつ露清間にこのような密約があると信じていた寺本はロシアの脅威、チベット側への浸透を現実以上に大きくとらえ、それが彼の判断にバイアスをかけていたと考えられる。使節派遣工作時にうかがえる寺本の熱心ではあるが焦りにも似た性急な行動の背景には、そうしたこともあったことを押さえておきたい。

第二に寺本の諜報工作活動の特徴を見てみたい。寺本は他者から指令を受けて単に末端の作業に没頭したのではなく、東アジアの全体を見渡しながらかロシアの勢力を封じ込めるといふ広大な戦略を構想していた。彼の諜報工作活動はそうした戦略的ヴィジョンにもとづいていたという点に特色がある。以下は寺本のチベット工作の核心をもっとも集約的に述べた重要箇所であるため、長文ではあるが、煩をいとわず紹介してみたい。読みやすさを考慮して現代文に改めた形とし、適宜カッコをつけて文意を補足した¹¹⁾。

- ① ダライ・ラマは〔英印軍のラサ侵攻と通商市場の開設によって〕イギリスを憎み、〔四川軍のカム地方進撃とチベットへの強圧的政策によって〕清から離れ、ロシアに親しもうとしているが、その心

事を一変しなければならない。

- ② ダライと連絡を結んだ上で、〔日本が友好政策をとっている〕清のためにチベットについて謀ってやり、チベットと清の関係を改善に導く。そうすることによって、最近接近する傾向があるロシアと清を離間させる。

- ③ さらにイギリスのためにチベットに通じてやり、チベットとイギリスの関係を改善に導く。そうすることによって日英同盟を強化する。

- ④ 以上によって清、イギリスを日本、チベット側に引きつける。
〔それによってロシアを孤立させる。〕

- ⑤ こうして仕向けた露清の疎隔を将来の日本の満洲進出にも利用し、内蒙古にロシアの南下を阻止する「生籬」〔生け垣〕をつくる。

- ⑥ 以上を実現するためには、ぜひとも同一宗教の縁をもってダライ・ラマに接近する必要がある。

- ⑦ ダライの心をロシアから絶対的に引き離すには、日本が清と共同してそれを行おうと、単独で行こうと、いずれにしてもチベットと

の親善の道を講じなければならない。

⑧ この親善を実現する最短距離は、ダライまたは枢要の幕僚を日本に観光させることである。

⑨ ダライ招請が外交上種々の関係を及ぼす懸念があるとすれば、枢要の幕僚を呼ばよ。それにはダライ・ラマが親任するラーマン堪布がふさわしい。

⑩ ラーマン堪布を日本に観光させ、宗教的に歓待し、彼の心に日本文明を注入すれば、最終的にダライはロシア親善の気持を捨て、清朝政府を通じて日本に頼るようになる。

⑪ 留学生の交換も同じ趣旨から行われる。

⑫ 以上のことから日英の利益（ロシアの南下阻止）も、日清の親交も実現が可能となる。

右のように寺本はダライ・ラマをロシアから日本側に引きつけ、日本が中軸となってチベット、清、イギリスの関係改善をはかり、ロシアを孤立させようと考えた。寺本にとってチベット懐柔、抱き込み、友好工作は、すなわちロシア孤立、封じ込め工作であったといえよう。彼は内

心ではイギリスに対しても警戒心をもっていたが、この時点では同国を利用して、まずは第一の仮想敵国ロシアの勢力進出を抑制しようと考えたのである。このようなヴィジョンないしシナリオを描いたという点に、彼が仏教学者としてのアカデミックな専門の枠だけにとどまらないイメージ力を備えていたことがうかがえる。寺本の諜報工作活動のもっとも大きな特徴は、戦略的ヴィジョンを自己の手で描き出し、自らそれを実践するものであったということである。

第三に北京の日本公使館（とくに伊集院公使）がダライ・ラマ側に与えた影響である。この点についてはすでにある程度触れているが、さらに踏み込んで検討してみたい。伊集院自身は小村外相への報告の中で、この工作が参謀本部の福島意に出で、西本願寺とも打合せの上、北京の青木少将よりその方針で寺本に旨を含めており、当館においてはむしろこれを「補助スルノ精神」にて、別段訓令を仰がないにしても、外交上差し支えない程度において、寺本を「指導利用シタ」としている¹⁵。それではここでいう「補助」とはどのようなものであったのだろうか。

前に述べたようにダライ・ラマの使節訪日が最終的に中止になった際、伊集院はチベット側に将来の使節派遣については便宜をはかるよう取り計らうので、「必ず我好意ニ信頼シテ可」である旨を告げた。また伊集院自身、公使館員を連れてダライ・ラマ本人に謁見している。それらを表面的に見ると、伊集院はダライ側に友好的、協力的であったように見える。しかしながら伊集院の本音は以下にあった。「要スルニ達頼側ト多少ノ関係ヲ繋グハ、第一先方ノ動静ヲ知ルノ便アルノミナラズ、或ハ

之二依ツテ得タル情報ヲ利用シテ清国政府又ハ英国ニ相応ノ好意ヲ示スノ機会ヲ得ルコトモ可有之存候。」つまりダライ・ラマとの関係をつないでおけば先方の動静を知ることができ、そこから得た情報を用いて清、イギリスに好意を示すこともできるというのである。¹⁰ 情報の活用を強調してはいるが、そこには寺本が抱いているような大局観（チベットを日本側に引きつけ、日本が中軸となってチベット、清、イギリスの関係改善をはかり、ロシアを孤立させる）は見えてこない。寺本が日本、チベット、英清露の関係を総合的、有機的にとらえる一方で、伊集院は日英関係、日清関係の二国間関係に注意しており、その中でチベットは清国の一地域として付随的に利用する存在とみなされている。そうした軽視は寺本に対しても同様であり、伊集院は寺本を評して、多年の経験があり、ダライ・ラマの身边に知人が多く、シナ語・モンゴル語をよくし、西藏語もやや心得ているので、今後もある程度までは「利用スル」に足りるだろうとしている。¹¹

ここで伊集院はチベットと寺本に重要な戦略的価値をそれほど見出していなかったのではないかと疑問が生じる。それと関連して伊集院ら日本公使館員は民間人の寺本を見下していた形跡がある。寺本によると、彼は光緒帝崩御の発表の四日前に西太后が危篤状態に陥っていることをダライ側近の「秘信」によって探知した。そこで直ちに公使館と武官室に知らせたところ、館員たちは「官職ニ在ラサル一個人ノ妖言」として傾聴せず、そのまま「茶話トシテ打消」したという。さらに光緒帝の崩御を知った寺本は同様に公使館に急報したが、やはり信用されず、

館員は清朝政府の通知があつてはじめて信じるようになったのである。寺本は次のように嘆いている。公使館員諸氏が自分に対する信用をもう少し厚くし、応分の機密費をも給するような広い度量があればよいのに、「地位ノ卑キ一個の宗教家^マ」として待遇される自分の報告は到底信じられることもない。そのため光緒帝、西太后の崩御とそれによって生じた政変などについて、自分は比較的精细で敏なる事情に触れた観察情報をもっているが、「全く張り合ヒナキ為メ」沈黙してそのままにしている。日本公使館と外務省は「何事モ遅レ勝」で、「膳立ノ仕上リシニ非サレハ信セス作サスノ主義」なのだ¹²と寺本は嘆いた。

このようにチベットと寺本に大きな戦略的価値を見出さずに軽視する傾向が見られる伊集院公使と公使館員の基本的態度を知れば、それ以外の言動も読み解くことができる。寺本を通じて日本に親近感をもつようになったダライ・ラマ側は日本公使館にくり返しアプローチをかけるようになった。一九〇八年十月、ラーマン堪布が公使館を内密に訪ね、チベットの自治を語り、清朝に不満の意をかいま見せると、伊集院はチベットに対する清国の宗主権を認めた英露協商を引き合いに出し、「軽率妄動ヲ慎ミ務メテ清国ト融和スルノ策」を採ることを説いて聞かせた。¹³ また同月、ダライ・ラマ随員の一人が日本公使館を訪れ、紫禁城におけるダライ・ラマへの処遇が不当であることを訴えると、阿部守太郎一等書記官は「清国側ト穩便ニ談合シテ……決シテ軽率妄動スヘカラス」と忠告して引き取らせた。阿部書記官からこの件を聞いた伊集院公使は袁世凱に事情を打診したが、袁は右の不平は何らかの誤解だろう、ダライに

不平があるはずはないだろうが、念のため当局者に注意しておくと思われ流した⁽¹⁰⁾。さらに翌十一月、チベット側の依頼を受けた寺本が阿部書記官を訪れ、西太后に対するダライ・ラマの奉答文の内容についてチェックやアドバイスを求めた。これに対して阿部書記官は、「兎も角文字ハ成ルヘク婉曲ナルヲ可ナリト信ズ」として穏やかな文言を用いるよう促し、多少の意見を加えて引き取らせた。また翌日やって来た法王側の代表者に対しても、伊集院公使は「清国側ノ希望通りスル方結局利益ナラン」とし、「西藏ハ最早清国以外ノ外国ニ依頼スルノ方便ナク必スヤ清国トノ間ニ何等カノ決定ヲ為サザルヘカラサルノ地位ニ在リ」と述べた⁽¹¹⁾。

このように日本公使館はチベット側に対して、清朝政府と穏便に話し合い、それにしたがうことを一貫して唱えた。清国との協調を重んじる日本の外交官としてそれは自然な対応であった。ただしダライ・ラマがこうした相談を日本側に持ちかけるといふことは、国際外交に慣れていない部分を日本に補ってほしいという意味であり、それは日本にとって重要なシグナルでもあった。したがってこれを契機に裏面からチベットを取り込むチャンスが開かれる可能性があったが、日本公使館側にはそのような発想が乏しかったのであろう、チベット側に清朝への臣従を説き続けることに終始した。加えて伊集院公使は、チベットはもはや清国以外の外国に依頼する方便がないとまで述べており、そうなると本来チベット工作は不要であるということにならざるを得ないのではないか。伊集院は小村外相に対しては、福島・青木——寺本のチベット工作に対して「補助スルノ精神」をもって臨んだとしているが、実は工作自体の

価値を十分認めておらず、あくまでダライ側から情報を探り出すことを主眼として使節派遣に賛成の姿勢を見せたのではないだろうか。

ダライ・ラマは清朝との問題が通常的手段では容易に解決できないからこそアドバイスを求めたのだが、伊集院公使は「十分胸襟ヲ開テ商議スル所アラバ必ズ双方ニ満足ナル決定ヲ見ルニ至ルベシ」、清がチベットの改革を希望し、チベットがダライの地位を守ろうとする覚悟のどちらも正当であり、幸いどちらの希望も両立し得る性質のものであるといった文言をくり返した⁽¹²⁾。ダライ・ラマの側からすれば、清朝政府にしたがうことを求めるだけの日本外交官の態度は冷淡で事なかれ主義的印象を与えたであろう。もちろん伊集院には公使としての立場があり、清英露三国との関係を考え合わせながらチベットに対応していかなければならなかったのはいうまでもない。そうした見地から使節派遣を時期尚早として中止した彼の判断は必ずしも誤ってはならず、また一官僚である彼には本省からの訓令を受けないまま独断専行をすることも許されなかったであろう。しかしながら自身の裁量によって公使館でラーマン堪布のような要人と密談することはできたのであり、別の形でダライ側に対応する方法はあったのではないかと考えられるが、その形跡がうかがえないということは、やはりチベットを取り込むことに強い関心や熱意が乏しかったからではないか。

その後も伊集院公使の姿勢に変化は見られなかった。一九〇八年十二月、ダライ・ラマは北京を出発し、翌〇九年十二月にラサに入ったが、その直後の一九一〇年二月、四川軍のラサ侵犯によってインドへ脱出す

る。その間、在カルカッタの平田知夫総領事代理は事態を正確に把握し、四川軍がチベット僧院を焼き、僧徒を殺し、金属仏像を熔かして弾丸武器に用いるほか財物を掠奪するなど「暴行到ラザル所ナカリシ」との状況を伝えていた。⁽⁸⁾

一方、北京の伊集院公使はダライ・ラマの亡命をめぐる偽情報にもとつき情勢判断を誤っていた。⁽⁹⁾ また四川軍のラサ侵入直前、ダライ・ラマの使者として敦柱旺嘉と雍和宮の羅桑堪布が伊集院の下を訪れ、法王からの伝言としてチベットの清国官憲がチベット人を虐待し、ラマ僧に圧迫的態度に出て、近くチベット（ラサ）に官兵を駐屯させるといふ報道があり、チベット人一般は不安の念を抱いているので、穏和的な方針を取るよう清国要路に注意してほしいと懇願した。⁽¹⁰⁾ 実際、四川軍は一九〇五年の進撃以来、チベット各地で略奪と虐殺、寺院の破壊をくり返し、指揮者の趙爾豊はその残忍さから「殺戮者趙」「僧侶の屠殺者」と呼ばれ、ラサ政府は清朝政府に抗議文を出そうとしたが、駐藏大臣は取次ぎを拒否していた。⁽¹¹⁾ 四川軍のラサ侵攻を前にしてダライ・ラマは北京経由で日本に緊急信号を送ってきたということである。これに対して伊集院は、清国当局者に好機を見計らって穏和の方針に出るのが得策かつ必要である旨を注意するが、「達頼喇嘛（ダライ・ラマ）ニ於テモ、可成宗主国タル清国政府ノ命ニ從ヒ、其疑心ヲ生ゼシメ又ハ其感情ヲ害スルガ如キ行動ヲ慎ムト同時ニ、駐藏地方官ニシテ妄リニ虐政ヲ行ヒ圧制的態度ニ出ヅルニ於テハ、正々堂々ト実情ヲ政府ニ訴ヘテ、徐ロニ之ガ改善策ヲ講ズルノ肝要ナル旨」を述べた。⁽¹²⁾

ここで伊集院がチベットの状況を把握していないことがわかる。チベットが極限状態に陥っているという認識がない彼は、逆にチベット側が清朝政府の命令にしたがい、その感情を害するような行動を控えるよう求めている。それと関連して伊集院は清朝政府側に著しく傾斜していた。

事態を客観的に見ていたカルカッタの平田総領事代理とは対照的に、伊集院は四川軍のラサ侵攻の理由として、清朝政府が他国にチベットの利権を奪われないようチベットの確保を明確化しようとしたのに、愚かなチベット人はこれを疑い、ダライ・ラマがそれを拒んで今回の状況を招いたというのである。⁽¹³⁾ それは清朝政府の主張そのものであった。このような態度から正確な情勢判断を導き出すのは難しかったであろう。

こうした背景には外務省内で情報の伝達がうまく行われていないという問題、清国ではインドよりもチベット情報がはるかに入手しづらいという事情もあろう。しかしながら根本的には伊集院が清国における情報ばかりをうのみにしたこととチベットに関心が乏しかったことに起因するのではないかと考えられる。それからしばらくして辛亥革命が起こった際、伊集院は外交情報収集能力の欠如をあらわにし、いわばなすがままに革命の収束を待たざるを得ない状況に陥るが、その兆候はそれ以前から現れていた。⁽¹⁴⁾

以上見たように伊集院公使はチベットに強い関心があった、あるいはチベット工作に高い戦略的価値を見出していたとは考え難い。同時に清朝側に大きく傾斜していたため、チベットをめぐる情勢を客観的に観察することができなかった。前述のように伊集院は福島・青木——寺本ら

インのチベット工作に「補助スルノ精神」をもって臨んだと小村外相に報告しているが、清朝政府側に立ってそれにしたがうことを説き続ける彼の態度は、チベット側に日本外交官は実効力をもって自分たちを支援してくれないという不信感をもたせたのではないか。後に触れるように一九一四（大正三）年、ラサに滞在中の青木文教は、ダライ・ラマをはじめとするチベット指導層が「日本人は忠告提案が巧みだが、一片の実力をもって他を利用することがない」と見ていると報告している。そうしたチベット側の日本人イメージは北京の日本公使館との具体的な接触から形成され始めたのではないだろうか。したがって伊集院はダライ・ラマを抱き込むという福島、寺本の友好工作の趣旨とは逆の効果をもたらしたのではないかと考えられる。

以上、本章では参謀本部の福島のバックアップの下で寺本が行った諜報工作活動を検証した。ダライ・ラマと側近に食い込んだ寺本の情報と工作は、質量ともに非常に高いレベルのものであった。しかしダライの使節日本派遣は参謀本部と西本願寺の対立によって中止となり、それでも寺本は工作を継続したが、最終的に伊集院公使の判断で再度中止となった。しかし寺本が育てた派遣計画は、次の時期に入ると西本願寺の大谷光瑞法主と青木文教によって実現されることになる。

〔註〕

(1) 日本人チベット行百年記念フォーラム実行委員会編『チベットと日本の百年——十人は、なぜチベットをめざしたか——』（新宿書房、二〇〇三

年）、二二—二三頁。同書のほかに日本人のチベット潜入をトータルに扱った基本書は数多いが、例えば山口瑞鳳『チベット』上（東京大学出版会、一九八七年）、江本嘉伸『西藏漂泊』上、下巻（山と溪谷社、一九九三、九四年）、秦永章『日本涉藏史——近代日本与中国西藏——』（中国蔵学出版社、二〇〇五年）、江本嘉伸『新編 西藏漂泊——チベットに潜入した十人の日本人——』（山と溪谷社、二〇一七年）などがあり、近年は一般向けの評論として大島信三『ダライ・ラマとチベット——一五〇〇年の関係史——』（芙蓉書房出版、二〇一七年）が刊行されている。

(2) 単著に限って言えば、高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』（芙蓉書房、二〇一〇年）、『チベット学問僧として生きた日本人——多田等観の生涯——』（芙蓉書房、二〇一二年）、『ラサ憧憬——青木文教とチベット——』（芙蓉書房、二〇一三年）、『風のかなたのラサ——チベット学者 青木文教の生涯——』（自照社出版、二〇一七年）。

(3) 白須浄真編『大谷光瑞と国際政治社会——チベット・探検隊・辛亥革命——』（勉誠出版、二〇一一年）、白須『大谷探検隊研究の新たな地平——アジア広域調査活動と外務省外交記録——』（勉誠出版、二〇一二年）は外交文書を用いながら日本とチベットの関係を広く国際政治史の視野からとらえようとするものである。

また齋藤隼人「二十世紀初頭における日本・チベット関係史料」三重大学歴史研究会『ふびと』第六七号、二〇一六年一月は、台湾の国立故宫博物院図書文献館および中央研究院近代史研究所檔案館の所蔵史料を用い、一九〇八年九月から十二月における北京・黄寺でのダライ・ラマ十三世に対する日本人謁見の模様を明らかにしている。ここでいう日本人は、主に在北京日本公使館の阿部守太郎一等書記官、高尾亨二等通訳官、武官の青木宣純少将、松井石根大尉、川島浪速などであるが、寺本婉雅についても触れられている。齋藤氏の発見によって、従来の史料（東京大学東洋文化研究所蔵「内庁偵察達頼報告」、寺本婉雅『藏家旅日記』）ではほとんど判らなかつた謁見の詳細内容（手順、会談内容、贈答など）がはじめて解明されることになった。

- 4042 Ryosuke Kobayashi (小林亮介), "The Tibet-Japan Relations in the Era of the 1911 Revolution: Tibetan Letters from the Aoki Bunkyo Archive," 岩尾一史、池田巧編『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的发展』(京都大学人文科学研究所発行、臨川書店製作、二〇一八年) 所収は、近代チベット史を専攻する研究者が辛亥革命期のチベット・日本関係にメスを入れたもので、グライ・ラマと側近の対日政策を眼目として、日本側の反応、寺本婉雅、青木文教にも言及している。グライ・ラマの対外戦略を日本という要素を加えることによって従来の研究以上に複眼的に描き出そうとする論稿で、これからの研究の方向性、発展性を予兆するものである。それとともに国立民族学博物館青木文教アーカイブ所蔵のチベット語書簡(ラーマン堪布より青木文教宛、グライ・ラマ十三世より青木経由日本天皇宛)の紹介も貴重である。
- (4) 木村肥佐生「成田安輝西蔵探検行経緯——外交資料に見る東チベット經由入蔵挫折記——」(上)(中)(下)『アジア研究所紀要』第八、九、一〇号、一九八一、八二、八三年。同「成田安輝西蔵探検行経緯——資料編(長文報告および附属文書類)——」(1)(2)『アジア研究所紀要』第一三、一四号、一九八六、八七年。外務省外交史料館所蔵「成田安輝西蔵探検関係一件」文書を時系列的に並べて丹念に紹介しつつ考察を加えたものである。
- (5) 篠原昌人『陸軍大将福島安正と情報戦略』(芙蓉書房出版、二〇〇二年)、一七〇—一七五頁、同「明治時代の対チベット接近策——福島安正、寺本婉雅を中心に——」『軍事史学』四五卷一号(通巻第一七七号)、二〇〇九年六月。福島安正参謀本部次長と寺本婉雅によるグライ・ラマ工作について、五台山会談の成功からチベット使節日本派遣の中止までを中心に検証したものである。後者の論文で篠原氏は、福島次長の対チベット接近策のねらいは「ロシア勢力の排除」であり、「チベットの眼を日本に引き寄せること、ロシアの南下に対する壁を作ろうとしたのではあるまいか」と推察している。本稿を通じてこの点がより明確かつ詳細に判明するであろう。
- (6) 高本氏の前掲「ラサ憧憬」は青木文教の生涯を精緻に考証したものであるが、その第五章において青木のラサ出発からダーズリン到着までの言動を明らかにしている。その際、青木がグライ・ラマより、イギリスからの武器購入に協力し、それが不可能であれば日本政府と交渉することを依頼されていた点に言及し、青木とイギリス側との交渉を描写している。
- (7) なお寺本婉雅については、さらに高本康子氏が以下のように精力的に研究成果をあげている。「大陸における対『喇嘛教』活動——寺本婉雅を中心に——」『印度学宗教学会』『論集』第三九号、二〇一二年十二月、「日本入仏教者と『喇嘛教』」『日本仏教総合研究』第二二号、二〇一四年五月、「寺本婉雅の大陸人脈——大谷大学所管資料を中心に——」『印度学仏教学研究』六三卷一号、二〇一四年十二月、「寺本婉雅馬関連資料の現在——寺本家資料を中心に——」『印度学宗教学会』『論集』第四一、二〇一四年十二月。これらの中で高本氏は、後出の寺本日記(村岡家資料)に加えて寺本家資料も紹介し、寺本の人脈に着目しつつ、明治期の寺本の工作活動に補足的な説明を行っている。
- 加えて高本氏は昭和期の寺本のラマ教工作に考察を広げ、「寺本婉雅『喇嘛教』工作方案に見る戦時下日本と『喇嘛教』」『印度学宗教学会』『論集』第四二号、二〇一五年十二月、「海闊天空——五台山以後の寺本婉雅——」荒川正晴、柴田幹夫編『シルクロードと近代日本の邂逅——西域古代資料と日本近代仏教——』(勉誠出版、二〇一六年)所収を発表している。
- そのほかに金子民雄「解説」金子民雄編、寺本婉雅著作選集 第四卷『改訂増補 西蔵語文法』(うしお書店、二〇〇五年)が河口慧海の寺本批判に触れており、奥山直司「河口慧海・蔵蒙旅日記」武内房司編『日記に読む近代日本5——アジアと日本——』(吉川弘文館、二〇一二年)所収が、公刊されている寺本の『蔵蒙旅日記』を取り上げ、そこに記された旅程と行動を簡潔に紹介している。
- (8) イギリスの資料を用い、日本人のチベット潜入に触れた書籍としては、ピーター・ホップカーク著、今枝由郎、鈴木佐知子、武田真理子訳『チベットの潜入者たち——ラサ一乗車をめざして——』(白水社、二〇〇四年)、

- 原書 Peter Hopkirk, *Trepassers on the Roof of the World: The Race for Lhasa* (London: John Murray, 1982) が早々から知られているが、やはり日本人に焦点を絞ったものとして Scott Berry, *The Rising Sun in the Land of the Snows: Japanese Involvement in Tibet in the Early 20th Century* (New Delhi: Adrash Books, 2005) がある。タイトルは異なるがその中身は、同じ著者の *Monks, Spies and a Soldier of Fortune: The Japanese in Tibet* (London: The Athlone Press, 1995) と同一である。この二冊はインド省文書も参照し引用しており、チベットに潜入した日本人たちの足跡を海外に紹介した点で大きな意義のある作品である。ただしどちらかというところ一般向けの読者を想定しているためか脚注が少なく、典拠がはきまりしない箇所がやや見られる点が惜しまれる。また Scott Berry, *A Stranger in Nepal and Tibet: The Adventures of a Wandering Zen Monk* (Kathmandu, Nepal: Vajra Publications, 2008) は河口慧海を扱っているが、その他の日本人旅行者についても触れている。同書のオリジナルは *A Stranger in Tibet: The Adventures of a Wandering Zen Monk* (Tokyo: New York: Kodansha International, 1989) であるが、新版はその後の学界における河口研究の進展に合わせてこれを改めたものである。そのほか W. Wendy Palace, *The British Empire and Tibet, 1900-1922* (London: New York: RoutledgeCurzon, 2005), 130-135 がチベットに対する「日本の積極政策」に言及しているが、青木文教がカルカッタの日本領事館を通じてチベットに武器を供給する約束をした、そのために彼はラサに送られたとするなど、イギリス側の資料にのみ依拠しているため事実と多少ずれた記述が見られる。
- (9) 島貫重節、梅博対談「日露戦争における情報と作戦」(上)、『軍事史学』一七巻一号(通巻第六五号)、一九八一年六月、五一—五三頁。
- (10) 以下「十三世」を省略してダライ・ラマとのみ表記する。また厳密な引用の場合を除き、「達賴喇嘛」「西蔵」など現代使用されることの少ない漢字はできるだけ「ダライ・ラマ」「チベット」といったカタカナに改めた。
- (11) チベットの宗教的地位については、とくに石濱裕美子著、永橋和雄写真

『図説チベット歴史紀行』(河出書房新社、一九九九年)、ロラン・デエ著、今枝由郎訳『チベット史』(春秋社、二〇〇五年)などを参照し引用した。後者は次のように総括している。「十九世紀末には、チベットは、中国、ロシア、インド、ヒマラヤ諸国を覆う、戦略上デリケートな宗教ネットワークの中心にあった」(二〇七頁)。

- (12) 多田等観『チベット』(岩波新書、一九四二年四月第一刷、一九八二年特装版)、四二—四三頁にもこれと類似の「ラマ教々團図」が掲載されている。一九四〇年代の日本でラマ教(チベット仏教)工作にあたった人々も同様の地図イメージを頭に描きながら活動していたことが類推される。

- (13) チベットに対する各国の態度は主に、石濱『図説チベット歴史紀行』、ロラン・デエ『チベット史』のほか、以下を参照もしくは引用した。入江啓四郎『支那の辺疆と英露の角逐』(ナウカ社、一九三五年八月)、チャールズ・ベル著、田中一呂訳『西蔵・過去と現在』(生活社、一九四〇年九月)、山口瑞鳳『チベットの歴史』(長野泰彦、立川武蔵編著、北村甫教授退官記念論文集『チベットの言語と文化』(冬樹社、一九八七年)所収、W・D・シヤカッパ著、貞兼綾子監修、三浦順子訳『チベット政治史』(亜細亜大学アジア研究所、一九九二年)、R・A・スタン著、山口瑞鳳、定方展訳『チベットの文化 決定版』(岩波書店、一九九三年)、A・トム・グルンフェルド著、八巻佳子訳『現代チベットの歩み』(東方書店、一九九四年)、浦野起央『チベット・中国・ダライラマ—チベット国際関係史【分析・資料・文献】—』(三和書籍、二〇〇六年)、グレン・H・ムリン著、田崎國彦、渡邊郁子、クンチョック・シタル訳『14人のダライ・ラマ—その生涯と思想—』下(春秋社、二〇〇六年)、大村謙太郎『チベット史概説』(西蔵大蔵経研究会、一九五八年、慧文社、二〇一六年復刻)など。

- (14) 棚瀬慈郎『ダライ・ラマの外交官 ドルジエフ—チベット仏教世界の二〇世紀—』(岩波書店、二〇〇九年)、三八—四五頁。その他のドルジエフに関する邦文研究としては、桑島裕子「ロシア・チベット関係とアグヴァン・ドルジエフ」北海道大学大学院文学研究科『研究論集』創刊号、

- 二〇〇一年十二月、棚瀬慈郎「ドルジェフ自伝」(その一)、(その二)、滋賀県立大学人間文化学部研究報告『人間文化』第一七、一八号、二〇〇五年四、十一月。ドルジェフは仏僧であることもブリヤート・ナシヨナリスト、汎モンゴル主義者、汎仏教主義者など様々な顔をもつた。John Snelling, *Buddhism in Russia: The Story of Agvan Dorzhii, Lhasa's Emissary to the Tsar* (Shaftesbury, Dorset: Rockport, Massachusetts: Brisbane, Queensland: Element, 1993), 97-98. ドルジェフに対抗した寺本婉雅も別の形で愛国者、汎アジア主義者、汎仏教主義者であり、両者には相似的部分があった。
- (15) Alexandre Andreyev, *Soviet Russia and Tibet: The Debate of Secret Diplomacy, 1918-1930s* (Leiden; Boston: Brill, 2003), 27-28, 31-36.
- (16) *Ibid.*, 33, 36-37.
- (17) Nikolai S. Kuleshov, *Russia's Tibet File: The Unknown Pages in the History of Tibet's Independence* (Dharamsala, India: Library of Tibetan Works and Archives, 1996), 36-43. ただし同書はロシア側のチベット非関与を強調する傾向があり、ロシアの脅威は肉体の形をとらない幽霊以上のものになることはなかった(*Ibid.*, 63)としているが、カーゾンがロシアに抱いた恐れと疑惑のうち一部には根拠があり、一部は想像によるものだとする別の研究(Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 41)の方がバランスが取れている。
- (18) 石濱『図説 チベット歴史紀行』一〇五—一〇六頁、シャカッパ『チベット政治史』二六—二七、二一〇頁。
- (19) ロラン・デエ『チベット史』二四七—二四八頁。
- (20) 五台山会談については、白須淨真「一九〇八(明治四一)年八月の清国五台山における一会談とその波紋——外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊——」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第五六号、二〇〇七年十二月(のち白須『大谷探検隊研究の新たな地平』に収録)を参照のこと。
- (21) 小林隆夫「イギリスの上ビルマ併合とビルマ・中国の朝貢問題」愛知学院大学人間文化研究所『人間文化』第二五号、二〇一〇年九月、三九(三一四)—四〇(三二二)頁。Melvyn C. Goldstein, *The Snow Lion and the Dragon: China, Tibet, and the Dalai Lama* (Berkeley: University of California Press, 1997), 22.
- (22) JACAR (トシト歴史資料センター) Ref. B10073725800 明治十九年一月二十二日発、在芝罘日本領事館・松延珪領事代理より井上馨外相宛(外務省外交史料館)。原文の引用に際しては、合略仮名、略字、異体字を修正し、読みやすさを考慮して適宜句読点を付した。明治十年代の文書に關しては以下同様。
- (23) JACAR: B10073725800 明治十九年二月八日発、井上外相より在北京・島田胤則臨時代理公使宛(外務省外交史料館)。
- (24) JACAR: B10073725800 明治十九年三月十三日付、島田臨時代理公使より井上外相宛(外務省外交史料館)。
- (25) JACAR: B07080179000 明治二十六年三月二十七日発、中島雄公使館書記官「在清帝國公使通常報告」第六号(外務省外交史料館)。
- (26) JACAR: B07080179000 明治二十六年四月二十一日発、陸奥宗光外相より熾仁親王參謀総長宛(外務省外交史料館)。
- (27) JACAR: C13110148500 參謀本部管西局編集『支那地誌総体部』自卷一至卷六『明治二十年十一月、凡例一—二頁、『支那地誌総体部』卷一—卷六、明治二十年十一月出版(防衛省防衛研究所)。
- (28) 柴田紳一「福島安正參謀本部第二部長訓示『列國ノ現状ニ付テ』(明治三十五年五月、於參謀長會議)、『軍事史学』四五卷一—二号(通巻第一七七号)、二〇〇九年六月、六三—七二頁。これは一九〇二年に示されたものであるが、一八九六、七年においても同様の見方を抱いていたと考えられる。なお福島の見地はその部下である陸軍の情報畑のメンバーにも共通し、參謀本部の山県初男大尉が公刊した『西藏通覽』にも類似の考え方が明瞭に示されている。山県初男編『西藏通覽』(丸善、明治四十一(一九〇七)年九月、慧文社、二〇一〇年復刻)の巻頭には、參謀本部次長・福島中将による同書の趣旨を暗示した題字「闡幽」(隠れているものを明らかにするの

意)が掲げられており、巻末の結論部分は以下の通りであるが、これは福島ひいては参謀本部の見通しを代弁していると考えられよう。①清国政府はチベットに対して衰勢を回復することはできない、②イギリスはチベットに優越権を獲得したが、その成功を持続できるかは疑問である、③ロシアはイギリスの成功を傍観して従来の政策を一擲するようなことはなく、今後、多年モンゴルとチベット方面に扶植した潜勢力が現れて来る可能性がある、④英露の政策は時に消長があるにせよ、結局チベット問題に解釈を与えるものは英露両国である、⑤チベット問題はすなわち東アジアの大局に多大の影響を与えるものである。

(29) 成田安輝は、世界は西洋列強が膨張と国勢伸張をはかる巨大な碁盤のようなもので、空白地帯のチベットに碁石を置かなければ他の大国が奪ってしまうとし、日本の勢力扶植を急務とした。その際、チベットをねらう列強として成田の念頭にまず存在したのはロシア、ついでイギリスで、将来チベットはこの両国に分割されてしまうのではないかと憂えた(JACAR: B03050317100 明治三十三年十月三十日付、十二月二十九日付、成田より加藤高明外相宛、JACAR: B03050317200 明治三十四年三月九日付、成田より加藤外相宛(外務省外交史料館)。のち成田はイギリスによるチベット併合を予想し、将来ロシアはモンゴル、イギリスはチベットに支配圏をすみ分けるようになるかもしれないと危惧するようになる。JACAR: B03050317400 明治三十六年三月三日付、成田より小村寿太郎外相宛、JACAR: B03050317500 同年四月二十三日付、成田より小村外相宛(外務省外交史料館)。

他方、寺本婉雅は、西洋列強は爪と牙を磨き、呑噬(呑み嘯む)の欲をたくましくし、虎視眈々とすきを見ている。彼らは三国干渉によって遼東還付を迫った舌の根の乾かぬうちに清の各地に租借地を設けたがそれで止まるものではなく、とくにロシアはもっとも怖るべしで、イギリスも揚子江沿岸を落とし、このまま行けば「各国争闘の修羅場」である清は「分割の悲境に陥り、遂に手足を寸断せらる」だろうと見ていた。寺本婉雅著、横地祥原編『葳蒙旅日記』(芙蓉書房、一九七四年)、四八頁(明治三十二

年三月四日頃の記述)、六四頁(同年六月三日付、寺本より四川総督・奎俊宛書簡の一節)。また寺本も後にイギリスへの警戒を一層強め、イギリスはチベットを緩衝地帯にとどめるだけでは満足せず「西藏全帯ヲ掌中ニ弄センノ計」を抱いていると疑うようになった(同右、二〇四頁、明治三十九年九月十六日の記述)。それから二年後の一九〇八年、五台山や北京でダライ・ラマ工作を実施中の寺本は、戦略上日英同盟を重視する発言を行っているが、イギリスを信用していたわけではない。

(30) 松方三郎「成田安輝のこと」『山岳』第六五年(通巻第一二四号)、一九七一年三月、五三頁。黒龍会編『東亜先覚志士伝』下巻(黒龍会出版部、一九三六年、原書房、一九六六年復刻)、三三七頁。東亜同文会編『対支回顧録』下巻(対支功労者伝記編纂会、一九三六年、原書房、一九六八年復刻)、七七三頁。木村「成田安輝西藏探検行経緯(上)」三五―三六頁。(31) 木村「成田安輝西藏探検行経緯(中)」一四九頁は、成田が陸士の同期生、先輩にチベット探検案を示し、彼らの仲介で外務省の支援を得るに至ったことが十分考えられるとしている。

成田に年齢の近い陸士出身者として根津一(旧四期)、荒尾精(旧五期)、橋口勇馬(旧六期)、花田仲之助(旧六期)といった陸軍インテリジェンスの関係者があり、成田自身は生年からいって旧六期ないし七期あたりであったと考えられるが、のちに日清貿易研究所、橋口、花田の要請でアメリカから帰国している(「略歴」『山岳』第六五年、五五頁)ことを考えると、陸士中退後も情報系将校との関係が続いていたことがうかがえる。しかも橋口、花田と成田は旧薩摩藩の出身であり、同郷人としての強い連帯感もあったであろう。したがってこうした陸軍関係者(花田は当時ウラジオストク潜入中のため無理)が成田と参謀本部(福島第三部長など)との橋渡しを行い、さらにそこから外務省とのつながりができたと考えるのは自然であろう。

なお石光真清(旧十一期)によると、成田は陸士の旧六期か七期の生徒で、卒業点が足りないために歩兵軍曹のまま隊付を命じられ、そうした不名誉を受け入れることができずに自ら退校したという(江本『西藏漂泊』

- 上巻の第七章『特命』を負って——成田安輝の『進蔵』工作 付・石光真清の見た成田安輝「二〇二頁」。これが正しければ成田は陸士を病氣中退したのではないことになる。
- (32) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(中)」一四四、一四八頁。JACAR: B03050317100 明治三十三年十月三十日付、成田より加藤外相宛(外務省外交史料館)。同「成田安輝西蔵探検行経緯(下)」二〇七頁、JACAR: B03050317200 明治三十四年五月三十日付、成田より加藤外相宛(外務省外交史料館)。
- (33) この間の経緯については木村氏の論稿がもっとも詳細に明らかにしている。
- (34) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)」五五―五六、六〇―六一頁。同「成田安輝西蔵探検行経緯(下)」一八四、二一〇頁。
- (35) ちなみに成田の出発から一年近くを経た一八九八年十一月、やはりチベット潜入をめざして渡清した能海寛も福島と接触していた。日本出発の一年半余り前、能海は参謀本部第三部員の宇都宮太郎大尉を訪問して「有益ノ談話」を得るとともに、第三部長の福島大佐を紹介され、その約一週間後、牛込矢来町の福島の自宅を訪ねて亜欧旅行から帰国したばかりの福島からペルシャ、ビルマ、清などの事情を聞かされている。「使用日記(明治三十年)」四月二十日、二十八日の条、金子民雄監修、能海寛研究会編『能海寛著作集・第2巻「能海寛業績全記録Ⅱ」(うしお書店、二〇〇五年)所収、六八、七二頁。かねてからチベット行を希望する能海はそのことを宇都宮、福島に話し、何らかのアドバイスを得ようとした可能性がある。
- (36) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)」七六―七七頁。JACAR: B03050316800 明治三十二年七月三十日付、成田より青木周蔵外相宛(外務省外交史料館)。長文のため読みやすさを考慮して現代的な文体、言葉に改めた。以下、適宜同様。
- (37) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)」八一頁。JACAR: B03050316800 明治三十二年九月十三日付、成田より青木外相宛、同年十月十三日発信、内田康哉外務省政務局長より参謀本部福島大佐宛(外務省外交史料館)。
- (38) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(下)」一九三―二〇〇頁。JACAR: B03050317200 明治三十四年三月九日付、在上海成田より加藤外相宛(外務省外交史料館)。
- (39) 成田安輝『進蔵日誌(上)』『山岳』第六五年、四一五、二七頁。
- (40) 高本『ラサ憧憬』一二九頁。同書が紹介するように成田が写した写真のうち二四枚が「成田安輝氏拉薩旅行写真集」として『地学雑誌』の巻頭グラビアに六回にわたって掲載されている。『地学雑誌』一六年一八三―一八六号(明治三十七〔一九〇四〕年三月六日)、一九一―一九二号(同年十一月十二日)。「STAGE」『地学雑誌』の本文は閲覧できるが、巻頭グラビアはアップされていないので注意が必要である。
- (41) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(下)」二二〇頁が成田に支給された金額を計算している。それによれば、手当五年分三、四八〇円、西蔵行旅費二、七八〇円、支度金・旅費・日当二、〇〇〇円以上、進献用贈物代(金額不明)の合計八、二六〇円以上となる。
- (42) これらの点については木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)(中)(下)が明らかにしている。
- (43) 成田は小笠原諸島の智島(製塩業)、アラスカ地区(トレイドウェル金鉱)、アメリカ(ユニオン・パシフィック鉄道)などで実業に就き、一八九七年三月、台湾総督府民政局殖産部技師となり、拓殖業務のかたわら台湾各地を探検した(『略歴』『山岳』第六五年、五五頁)。
- (44) 一回目はグライ・ラマなどへの贈物を用意するため、二回目は四川総督に四川省開発九ヶ条の上申書を提出することを望み、その打合せをするためと称して外務省に一時帰国を申し出ている。木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)」四八頁、同「成田安輝西蔵探検行経緯(中)」一九〇―一九二頁。JACAR: B03050316600 明治三十一年十一月十二日付、成田より青木外相宛。JACAR: B03050317000 明治三十三年十二月十四日付、在上海成田より加藤外相宛(外務省外交史料館)。
- (45) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯(上)」四六一―四七頁。JACAR: B03050316600 明治三十一年七月二十九日付、在重慶加藤義三領事より小

村寿太郎外務次官宛、同年十一月二日付、鳩山和夫外務次官より加藤領事宛（外務省外交史料館）。なお同じころ（明治三十一年十一月十一日）神戸を出港する直前の能海寛も東本願寺の大谷法主からドライ・ラマあての親書を授かっている。「能海寛略年譜」金子民雄監修、能海寛研究会編『能海寛著作集・第1巻「能海寛業績全記録 I」』所収（うしお書店、二〇〇五年）、七頁。

(46) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯（上）」四九一―五三頁。JACAR: B03050316800 明治三十一年十二月二十二日付、在重慶加藤領事より都筑馨六外務次官宛、同年十二月二十四日付、成田より都筑外務次官宛、明治三十二年二月二十七日発遣、都筑次官より加藤領事宛（外務省外交史料館）。

(47) 木村「成田安輝西蔵探検行経緯（上）」七七、八〇頁、同「成田安輝西蔵探検行経緯（中）」一四九頁。JACAR: B03050316800 明治三十二年七月三十日付、成田より青木外相宛、JACAR: B03050316900 明治三十三年十月三十日付、成田より加藤外相宛（外務省外交史料館）。

(48) 成田安輝「進蔵日誌（下）」『山岳』第六六年（通巻第一二五号）、一九七二年三月、二三、三二―三五頁。

(49) さらにチキヤブ・ケンポはドライ・ラマの身辺用務のすべてとポタラ宮の財産を管理し、宗務局を通じてチベット全土の寺院行政を司る人物であった、本来は宗務担当閣僚であるが、その権力が大きいところからしばしば一般政治にも関与した人物であった（木村「成田安輝西蔵探検行経緯（下）」二二三頁）。

(50) 既存書は成田が「西蔵政庁の要路と会見して意見を交換した」、「法王政府の宰相総勅布に謁して謀る所あり」と記している。黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻、三三七頁、東亜同文会編『対支回顧録』下巻、七七三頁。しかし木村「成田安輝西蔵探検行経緯（下）」二二三頁が指摘するように、一介の清国商人に偽装した成田が、年来温めていた政治的意見を説いたことは想像できるものの、初対面のチベット宰相に対して十分な意思疎通ができたとは考えられない。

(51) 註(46)に同じ。

(52) ただし外務省、参謀本部は一面において成田の行動力を評価したのである、彼の帰国後も関係をもったようである。日露戦争の際、成田は小村外相と内田康哉駐清公使、福島少将と北京駐在・青木宣純大佐の間の連絡を行い、ゴビ砂漠を越えて大庫倫（現ウランバートル）に入るなどの特別任務にあたったほか、東亜義勇軍馬隊に参加して活躍したという（黒龍会編『東亜先覚志士記伝』下巻、三三七頁、東亜同文会編『対支回顧録』下巻、七七三―七七四頁）。

(53) 河口慧海『チベット旅行記』（四）（講談社学術文庫、一九七八年）。①、②についてはその引用箇所も含めて、清、ロシア、イギリスとの関係に言及しつつチベットの外交を論じた八〇―一二八頁が重要。②については一六〇―一六四頁、③については『チベット旅行記』（四）、一六〇―一六一頁、『チベット旅行記』（三）（講談社学術文庫、一九七八年）、二〇―二〇二頁。

(54) 河口慧海『チベット旅行記』（五）（講談社学術文庫、一九七八年）、一三三―一三七頁。

(55) 青木文教著、外務省調査局、慧文社史料室編『西蔵問題―青木文教外交調査書―』（慧文社、二〇〇九年）、九九頁。

(56) 年表「チベットと日本の百年」、江本嘉伸「チベットに向かった十人の日本人」『チベットと日本の百年』所収、一三、一三五頁。

(57) 高本康子、三宅伸一郎「寺本婉雅日記『新旧年月事記』翻刻」『大谷大清真宗総合研究所研究紀要』第三二号、二〇一四年三月、解題一四七―一五二頁、翻刻一六八―一七四頁。解説が困難な文字については写真を付し、後学のためにきめの細かい配慮がなされた行き届いた翻刻である。またこの寺本日記を紹介した報告として、三宅伸一郎「日本人初の入蔵者・寺本婉雅に関する新出資料について」（二〇〇七年度大谷学学会研究発表会発表要旨）『大谷学報』八七巻二号、二〇〇八年三月がある。

これまで帰国後の寺本の再入蔵準備については、寺本『蔵蒙旅日記』でほとんど触れられておらず、同書三三七頁所収の明治三十三年六月一日付・福島より寺本あての書簡からその消息をわずかにうかがうことしかできない

かった。しかし右先学による『新旧年月事記』の発見、翻刻によって詳しい経緯が明らかとなった。

- (58) 寺本婉雅『当蕃会盟碑文』(一九二九年推定、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室所蔵) 所収の「西藏秘密国の事情」一三—一四頁。同資料の存在、所蔵先は高本康子「明治期日本と『喇嘛教』——北京雍和宮活仏阿嘉呼図克図の来日を中心として——」白須編『大谷光瑞と国際政治社会』所収、三一七、三一九頁より知ることができた。

なお『当蕃会盟碑文』は「当蕃会盟碑文」と「西藏秘密国の事情」の二点を製本したものであるが、前者の「当蕃会盟碑文」は『大谷学報』一〇巻三号、昭和四(一九二九)年九月にも収録されている。後者の「西藏秘密国の事情」は目次に「昭和四年夏七月下旬」と記されているので、そのときになされた講演筆記であろう。なお「西藏秘密国の事情」の全一五章のうち二章分にあたる抜粋が、寺本『藏蒙旅日記』三〇七—三一二頁に収録されている(少し表現が異なる箇所がある)。

- (59) 阿嘉呼図克図訪日の事実関係、動静記録は、高本『近代日本におけるチベット像の形成と展開』八四—九〇頁が詳細に説明し、同「明治期日本と『喇嘛教』」が再検証している。後者の論考は、阿嘉呼図克図の来日実現は寺本の尽力のみによるものではない可能性があるとしている(三〇五頁)。
- (60) 寺本『藏蒙旅日記』九四—九五頁。ちなみに国立国会図書館地図室はそれより少し後の「西藏全図」(陸地測量部、明治四十一(一九〇八)年二月製版、七一×一四五センチ)を所蔵しているが、それはチベット全土の詳細地図であると同時にチベット、インド間の連絡道路拡大図も合わせて載せている。この時点になると参謀本部員がチベットの地理を相当精密に把握しながらイギリスのチベット進出ルートを押さえていたことがうかがえる。ただし同地図は、胡惟徳(駐ロシア公使)による光緒三十(一九〇四)年七月付の識語が記されていることなどからうかがえるように、参謀本部外局の陸地測量部がオリジナルに作成したのではなく、清国で作られた原図を製版したものであると考えられる。

- (61) 寺本はモンゴル人を自称してチベットに入り、阿嘉呼図克図の弟子チメ・

ノルブ、別名ネルバと称してラサのセラ大学(セラ寺)内の阿嘉の公館で寝起きたという(寺本『当蕃会盟碑文』所収の「当蕃会盟碑文」二頁、「西藏秘密国の事情」三九—四二頁)。

- (62) 寺本『藏蒙旅日記』一七五—一七六頁。
- (63) Andreyev, *Sonnet Russia and Tibet*, 30.
- (64) 寺本『藏蒙旅日記』一八四頁。
- (65) 同右、一八九、一九二—一九五頁。
- (66) 同右、一九六頁。
- (67) 藤田佳久『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(大明堂、二〇〇〇年)、第三章。
- (68) ちなみに外務省によって新疆、外蒙古に派遣された日本人五名の一人、波多野養作は一九〇五年七月に北京を出発して新疆を回り、その帰路クンブム寺を訪問した。このとき同寺に滞在中の寺本の紹介によって一九〇七年三月、グライ・ラマに謁見し、六月に北京に戻っている。この波多野を含めた五人の旅行の成功によって同年、外務省から福島参謀本部次長経由で根津院長に三万円が交付され、東亜同文書院生による本格的な清国調査旅行が始動することになった(同右、第三、四章)。
- (69) 寺本『藏蒙旅日記』卷末「寺本婉雅略年譜」、三〇四—三〇六頁「参謀本部に於ける講演メモ」。
- (70) JACAR: B03050601500 明治四十一年十月二十八日付、寺本婉雅「報告書」(外務省外交史料館)。
- (71) JACAR: B03050605400 明治四十一年十月二十八日付、在清国帝国公使館「北京情報 機密ノ部」第一号(外務省外交史料館)。
- (72) JACAR: B03050605500 明治四十一年十一月十七日付、在清国帝国公使館「北京情報 機密ノ部」第三号、JACAR: B03050605800 同年十二月十七日付、「北京情報 機密ノ部」第五号、JACAR: 03050605900 同年十一月二十八日付、「北京情報 機密ノ部」第六号(外務省外交史料館)。
- (73) サンクトペテルブルク(一九一四年、ベトログラードに改称)の仏教寺院は一九〇九年に着工され、一四年に完成した。最初の礼拝はロマノフ朝

三百周年記念を祝う中、一九一三年に行われていたが、一五年にグラントオープンングセレモニーが実施された。Fatana Shaumian, *Tibet: The Great Game and Tourist Russia* (New Delhi: Oxford; New York: Oxford University Press, 2000), 119. ㉞の寺院建立計画の背後には明らかに政治的な動機があった。なぜならドルジェフはそれによってサンクトペテルブルクにおけるグライ・ラマの非公式の代表所をつくるとともに、サンクトペテルブルクの間のより密接なきずなを促進しようとしたからである。

Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 49.

(74) JACAR: B03050605900 明治四十一年十一月二十八日付、在清国帝国公使館「北京情報 機密ノ部」第六号(外務省外交史料館)。

(75) 寺本『蔵蒙旅日記』二四〇頁、巻末「寺本婉雅略年譜」。資金については、例えば一九〇七年に福島から五百円が送金されたことが記録されている(二三五頁)。さらに同年、寺本が脊髄病のため起居不自由になった際、福島は振武学校の費用から三百円を捻出して寺本に送っている。『福島安正日記(明治四十年日記摘要 附滿韓視察記事)』明治四十年九月十六日の条、憲政資料室収集文書一三五八―三(国立国会図書館憲政資料室所蔵)。

(76) 寺本『蔵蒙旅日記』二一五、二一九、二三三―二二五、二二七―二二八頁。

(77) 同右、二三三―二三四、二三六―二三七頁。

(78) Kobayashi, "The Tibet-Japan Relations in the Era of the 1911 Revolution," 105-106. 明治四十年十一月二十、二十三日付、寺本婉雅より大隈重信宛書簡、日本史籍協会編『大隈重信関係文書』六(東京大学出版会、昭和四十五年復刻版)、三三三―三三四頁。同じ書簡は早稲田大学大学史料センター編『大隈重信関係文書』七(みすず書房、二〇一一年)にも収録され、早稲田大学図書館所蔵・古典籍総合データベースのウェブサイトでも閲覧が可能である。

なお、②の「日本の威力を目撃させる」であるが、翌一九〇八年十月、グライ・ラマがちょうど宿泊していた北京の雍和宮を日本兵二部隊百二十名が「遊覧」「観覧」している(齋藤「二十世紀初頭における日本・チベッ

ト関係史料」五三頁)。これは文字通り単なる見物であったのかもしれないが、寺本の意図を実現するデモンストラーションの一種であった可能性も考えられよう。

(79) 寺本『蔵蒙旅日記』二八四―二八五、二八七頁。

(80) 五台山会谈実現までの福島らの工作については、寺本『蔵蒙旅日記』の記述に加えて、篠原「明治時代の対チベット接近策」が詳しい。

(81) この中止の理由について高本「明治期日本と『喇嘛教』」三一九頁は、寺本より大隈重信あての書簡と寺本『唐蕃会盟碑文』所収の「西蔵秘密国の事情」の記述を引いて次のように説明している。当初西本願寺が費用負担を了承していたが、急にとりやめられ、寺本はその肩代わりを参謀本部に打診したが断られ、大隈に日本への往復費用は北京で工面するので、滞在の費用を都合してほしいと依頼した。北京で確保する資金の半額は伊集院彦吉公使が引き受けたが、寺本によると「伊集院氏の違約と、或る人(大谷光瑞氏)のために秘密が暴露したため」招致が失敗したという。

他方、篠原「明治時代の対チベット接近策」一四一―一六頁は以下のように説明する。①第二次日英同盟協約、第一次日露協約によって日本と英露両国との友好関係が保たれている中でチベット人使節を日本に呼ぶことは、両国から猜疑の目で見られることになる。②グライ・ラマが北京に滞在中、列国は清朝政府が制限を課さざるを得ないほど積極的にグライ・ラマに接触し、チベット側も意欲的であり、そうした北京の外交合戦によって、福島は日本がチベットをめぐる複雑な問題に直面する事態を懸念してこれまでの方針を断念したのではないか。③福島と寺本の考え方に差が生じていたのではないかと思われる。福島ら当局者の考えはまず使節を日本に招くことであったが、寺本は五台山会谈直前にグライ・ラマに直接日本観光を勧めるなど一歩も二歩も先を行っている。福島としてはこのままでは自らの意図するところと違う方向に引張られていく心配が出てきたと思われる。

(82) 明治四十一年十一月(日不明、内容からいって二十五日以降)、寺本婉雅より大隈重信宛書簡、『大隈重信関係文書』六、四〇二頁。

- (83) 明治四十一年十月二十七日付、寺本より大隈宛書簡、『大隈重信関係文書』六、三九三―三九五頁。
- (84) 寺本婉雅『西藏蒙古経営私議（附日本対達頼国王関係論）』（明治四十二年四月初旬脱稿、謄写版、公益財団法人東洋文庫所蔵）、一三一―一三六頁。同書には明確なページ数が記載されていないため中表紙を一頁目として換算した。なお東洋文庫所蔵本には松浦伯爵家の蔵書印が押されており、寺本の活動を支援した松浦厚に寄贈されたものであることがわかる。同書はそのほかに国際仏教学大学院大学附属図書館にも所蔵されている。
- (85) 同右、一三七頁。
- (86) JACAR: B03050601500 明治四十一年十月二十八日付、寺本婉雅「報告書」（同年十一月七日付で伊集院公使より小村寿太郎外相あてに打電されたもの）（外務省外交史料館）。
- (87) 寺本『蔵蒙旅日記』二九二頁。
- (88) 同右。
- (89) 註(82)に同じ。
- (90) 同右、四〇二―四〇三頁。
- (91) 同右、四〇三―四〇四頁。
- (92) 同右、四〇四頁、寺本『蔵蒙旅日記』二九三頁。
- (93) 同右、二九三頁。
- (94) 同右。
- (95) 寺本『西藏蒙古経営私議』一三八―一三九頁。
- (96) 寺本『蔵蒙旅日記』二九三頁。
- (97) 同右。
- (98) 同右。さらに十二月十五日、伊集院公使自身が小田徳五郎二等書記官らとともに六名で黄寺を訪れ、ダライ・ラマに謁見している（齋藤「二十世紀初頭における日本・チベット関係史料」六〇頁）。
- (99) 同右、二九三―二九四頁。
- (100) JACAR: B03050601500 明治四十一年十二月二十六日付、伊集院公使より小村外相宛（外務省外交史料館）。
- (101) 寺本『西藏秘密国の事情』一二―一三、五四―一五五頁。
- (102) 帰路の寺本は疲労のあまり船内で病体となり、「頭腦聊力錯覚ヲ来セシ」ほどであった（寺本『蔵蒙旅日記』二九四頁）。
- (103) 寺本『西藏蒙古経営私議』の第二章「吾人の第三回入蔵の準備」に寺本の計画が記されている。それによるとダライ・ラマから信頼を受け、その弟子となることを許された彼は、往復を二年とし、ラサに三年間留学するつもりであった。その間、東亜問題の緊急事件が起こったときは臨機に出入往還して「国家政策に資し」、そうでないときはダライの宮中に住居して「諸般の監視をなし」、かたわら西藏の文学、歴史、宗教の研究に従事するというのである。さらに自分と同一思想を有し、意思がもっとも堅固な有志者であれば、同様に入蔵するのも可であるとしている。このように寺本は帰国後までも一九〇九年四月初旬の時点で、なおチベットに赴き、ダライ・ラマの近くでモール（長期潜水スパイ）のような形で情報を収集しながら、いざというときに日本の政策に寄与しようと考えていた。問題はなぜそれが実現しなかったかということである。翌一九一〇年二月の四川軍のラサ侵攻とダライ・ラマの亡命という状況の変化、資金調達の問題など様々な理由が想像できよう。しかし寺本は前回のように参謀本部、福島からの支援を受ける気にはならなかった可能性がある。参謀本部と西本願寺の対立から使節派遣が中止になった際、彼は「軍人等ノ心胆小ニシテ極メテ狡猾ナルヲ洞観致シ候」との失望を感じていたからである（明治四十一年十一月（日不明）、寺本より大隈宛書簡、『大隈重信関係文書』六、四〇三頁）。
- (104) JACAR: B03050601500 明治四十一年十月二十五日付、寺本婉雅「北京駐錫達頼喇嘛隨從官ト其策謀者」（外務省外交史料館）。
- (105) Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 50.
- (106) *Ibid.*, 51.
- (107) *Ibid.*, 50-51.
- (108) JACAR: B03050601500 明治四十一年十月二十八日付、寺本婉雅「報告

書」(外務省外交史料館)。

(109) 寺本『藏蒙旅日記』二九一頁。後年ラーマン堪布は青木文教に日本へ留学生を送りたい意向を示した書簡を送っているが (Kobayashi, "The Tibet-Japan Relations in the Era of the 1911 Revolution," 116-117) するなどとは寺本の工作の効果が後々まで持続した一例といえよう。

(110) 寺本『西蔵蒙古経営私議』一〇六頁。

(111) 註(104)に同じ。

(112) 寺本『西蔵蒙古経営私議』八一頁。

(113) Andreyev, *Soviet Russia and Tibet*, 39-40. この「露清密約」は日本でも信じられるようになり、南満洲鉄道株式会社北京公所研究室編『英支西蔵問題交渉略史』(南満洲鉄道北京公所研究室、大正十五(一九二六)年八月、慧文社、二〇一五年復刻)、二六頁にも既定の事実として条文が掲載されている。

(114) JACAR: B03050601500 明治四十一年十月二十八日付、寺本婉雅「報告書」(外務省外交史料館)。

(115) JACAR: B03050601500 明治四十一年十二月二十六日付、伊集院公使より小村外相宛(外務省外交史料館)。

(116) 同右。

(117) 同右。

(118) 明治四十一年十一月(日不明)、寺本より大隈宛書簡、『大隈重信関係文書』六、三九七―三九九頁。また後年寺本は、かつてチベットへの同行者であった能海寛が不慮の死をとげた際、日本の官憲が「何等の捜索と調査とを為さざるのみならず、支那政府へ向つて何等の交渉をもせられなかつた」、「日本の僧侶は日本の臣民に非ずと云ふやうな冷淡な非立憲的態度でありました」との不満も洩らしている(寺本「西蔵秘密国の事情」八頁)。

(119) JACAR: B03050605400 明治四十一年十月二十八日付、在清国帝国公使館「北京情報機密ノ部」第一号(外務省外交史料館)。

(120) JACAR: B03050605500 明治四十一年十一月十日付、在清国帝国公使館「北京情報機密ノ部」第二号(外務省外交史料館)。

(121) 同右。

(122) 同右。

(123) 平田は清朝政府が従来の宗主権にあきたらず、チベットを他州(他省)と同一の地位に置くことを政策の骨子とし、ダライ・ラマの権能を殺ぎ、清国人の移住奨励、兵力増加を行ったため、僧侶人民の反抗が甚だしくなつたと客観的に観察している。JACAR: B03041187400 明治四十三年二月二十四日付、在カルカッタ平田知夫総領事代理より小村外相宛(外務省外交史料館)。またこれまでのイギリスのチベット関与はロシアの南下に対抗する必要からで、ロシアが後退し、かつ英露協商でチベットにおける特殊権益を否定した以上、イギリスはチベットの現状を維持するほか何の野心をもたない、したがってこの機会を利用してチベットに積極的政策をとることは想像できないと適確に分析した。JACAR: B03041187400 同年三月十日付、平田総領事代理より小村外相宛(外務省外交史料館)。

(124) JACAR: B03041187400 明治四十三年三月十日付、平田総領事代理より小村外相宛(外務省外交史料館)。

(125) 伊集院は「例の筋」から、①イギリス駐在清国公使と外務部、②外務部と四川総督の往復公電を入手し、それにもとづき四川軍のラサ進攻とダライ・ラマのインド亡命については、ダライが温宗堯駐蔵大臣を籠絡してイギリス側と密約を締結したことが裏面の原因であるようだ」と判断した。JACAR: B03041187500 明治四十三年三月六日発、伊集院公使より小村外相宛(外務省外交史料館)。しかし温駐蔵大臣はむしろ四川軍のラサ進駐を認めるよう法王側に圧力をかけたのであって、「イギリスとの密約」とともに伊集院の見立ては事実と反していた。同公使は清朝側から偽情報をつかまされていた可能性がある。

(126) JACAR: B03041187300 明治四十三年二月二十六日付、伊集院公使より小村外相宛(外務省外交史料館)。

(127) ロラン・デュ『チベット史』二三六―三三七頁、シャッカバ『チベット政治史』二七八―二七九頁。

(128) JACAR: B03041187300 明治四十三年二月二十六日付、伊集院公使より

小村外相宛（外務省外交史料館）。

(129) 同右。

(130) 飯森明子「辛亥革命と駐清公使伊集院彦吉——伊集院日記を中心に——」『法政政治学論究』第三二号、一九九六年十二月、四二四—四二五頁。また池井優「日本の対袁外交（辛亥革命期）」(一)、(二・完)『法学研究』三五卷四、五号、一九六二年四、五月も、伊集院の情勢判断の誤りが辛亥革命時の日本の対清外交失敗の原因の一つになった点を指摘し、「伊集院の接触範囲が北京中心に限られ、また袁世凱を年来の友人と信じて行動したため、ともすればその情報の蒐集、判断が片寄りがちで、大局を見通す洞察力を欠いた」としている。一方、野村乙二郎「伊集院彦吉論」『政治経済史学』第一〇一号、一九七四年十月、一〇頁は、伊集院が辛亥革命への対応に失敗した原因の多くは上司である内田康哉外相の外交指導のまずさにあったとしている。しかしその内田外相が伊集院から明確な情報が届かないことに業を煮やして「此際特ニ貴官ノ御考慮ヲ促カシタキハ袁ノ我ニ対スル態度ヲ探究スルノ一事ナリトス」と打電しているのである（池井「日本の対袁外交（辛亥革命期）」(二・完)、五二頁より再引）。その他に伊集院と辛亥革命、イギリス・チベット関係に言及したものとして、馬場明『日露戦争後の日中関係——共存共栄主義の破綻——』（原書房、一九九三年）の第三章「書翰にみる駐清公使伊集院彦吉」がある。

(131) なお伊集院の後任の山座円次郎公使、水野幸吉参事官は情報面で顕著な功績をあげている。一九一三年、中国、チベット間を調停するシムラ会議が開催された際、山座公使は中華民国総統府政治顧問のジョージ・E・モリソン（George Ernest Morrison）から水野参事官を介して中国代表・陳貽範の外交部宛公電の写しを入手し、これによって中国とチベットのそれぞれの要求を本省に報告することに成功した。日本は双方の手の内を知ることができ、山座報告は本省でも重視され、日本の各国在外公館に転送されてくる。JACAR: B0304118700 大正二年十一月十一日（十日の誤りか）大連発、山座円次郎公使より牧野伸顕外相宛、同年十一月二十五日付、牧野外相より在英井上勝之助大使、在独杉村虎一大使、在仏石井菊次郎大

使、在澳西源四郎代理大使、在伊篠野乙次郎代理大使、在露田付七太代理大使、在米珍田捨己大使、在カルカッタ柴田要治郎総領事宛（外務省外交史料館）。その後も山座はモリソン情報にもとづきシムラ会議の経過を報告したが、約二ヶ月後、水野参事官、山座公使が相次いで急死し、山座を中心とするインテリジェンス活動は杜絶する。

（以下次号掲載）

【付記】

本稿の作成にあたっては平成二十八年度・拓殖大学人文科学研究所研究助成金を活用させて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。